

旧制中等学校教材史上の島崎藤村

橋 本 暢 夫

はじめに

近代国語教育において、島崎藤村の作品は、かなり大きな位置を占めている。現在の国語教育の立揚からみても、詩の鑑賞指導、小説の鑑賞指導、また読書指導などにおいて、重要な課題をになっている。

今回は、藤村の作品が旧制中等学校の教材として、どのように採りあげられてきたかを報告したい。

調査は、国立教育研究所付属教育図書館蔵の中学校・女学校読本を対象とした。

以下、採録の状況を、一、1ジャンル別、2作品別、3学校別、4学年別、5時期別、二、教科書別としてとらえ、それぞれの傾向と特色について、考察を進めることにしたい。

一、旧制中等学校（中学校・女学校）の読本中、藤村の作品を採録した教科書は、三八種（き）、一〇八四冊である。

（注）訂正本、改訂本なども一種としてあげた。）

1、ジャンル別採録状況

採録の状況を教材の種類別に整理したのが次の表である。

注、学校別のらんの数字は、右が中学校、左が女学校のものである。

計	教材の種類		詩教材		スケッチ・紀行文教材		感想・評論文教材		童話教材		小説教材		消息文教材	
	採録 個所	学校別 頻度数	編		個所									
180	1	0	37	399	42	119	201	78	16	20	5	33	16	5
	通		編	227		76	136	28	28		49	33	16	5
1318	5		626		195		337		106					

（二教科書平均採録数、4回）

詩および感想・評論文が多く、小説の採りあげられかたの少ないのが目だつ。

- 2、作品別採録状況
- 3、学校別採録状況

a 詩教材

注、各作品の頻度数より採録時期までのらんの数字は右側が中学校・左側が女学校のものを示している。採録時期のうち大正・昭和のらんは五年ごとに区分した。

作品名	出典	頻度	採録時期	初採録年月日	作品発表年月日	作品出版年月日
晩春の別離 <small>入時は暮れゆく春より</small>	夏草	113	明治 2	M. 37. 12. 11	M. 33. 1. 28	M. 31. 12. 6
千曲川旅情の歌 <small>小諸なる古城のほとり</small>	落梅集	95	明治 4	T. f. 1. 8	M. 33. 4. 13	M. 34. 8. 25
椰子の実 <small>入名も知らぬ</small>	落梅集	65	明治 1	M. 44. 10. 28	M. 33. 6. 25	M. 34. 8. 25
春の曲 <small>入うてや鼓の春の音</small>	若菜集	48	明治 2	M. 38. 11. 15	M. 30. 1. 25	M. 30. 8. 29
舟路 <small>入海にして響く鱸の声</small>	落梅集	58	明治 2	M. 38. 11. 18	M. 33. 6. 25	M. 34. 8. 25
暁の誕生 <small>入東の空のほのぼのと</small>	夏草	36	明治 2	M. 40. 10. 30	M. 31. 12. 6	M. 31. 12. 6
問答の歌 <small>入梅は酸くして梅の樹の</small>	落梅集	34	明治 2	M. 38. 11. 15	M. 33. 6. 25	M. 34. 8. 25
春の歌 <small>入春は来ぬ</small>	若菜集	22	明治 2	M. 40. 10. 30	M. 30. 1. 20	M. 30. 8. 29
おえふ <small>入処女そ経ぬるおほかたの</small>	落梅集	21	明治 2	T. 13. 9. 15	M. 32. 11. 15	M. 34. 8. 25
労働雑詠 <small>入朝はふたたび</small>	落梅集	19	明治 2	M. 44. 12. 28	M. 32. 11. 15	M. 34. 8. 25
響りん <small>入響りん</small>	落梅集	19	明治 2	M. 44. 12. 28	M. 32. 11. 15	M. 34. 8. 25
常磐樹 <small>入あら雄々しきかな</small>	落梅集	17	明治 1	M. 41. 12. 5	M. 33. 1. 28	M. 31. 12. 6

- 4、学年別採録状況
- 5、時期別採録状況

学校別、学年別、時期別の採録状況を、便宜上、作品別にまとめ表わしたのが次の表である。

鳥なき里へ鳥なき里の蝸蝓やV	若菜集	12
潮音へわきて流るゝV	若菜集	10
懐古人天の河原に八百萬V	〃	9
二つの泉へ自然の母の乳のしづくV	夏草	8
秋風の歌へしづかにきたる秋風のV	若菜集	7
春やいづこにへ霞のがけに萌えいでしV	一葉集	7
5	2	1
6	1	6
7	1	5
8	2	3
9	1	3
10	7	12
11	4	6
12	1	6
13	1	1
14	1	1
M. 39. 12. 11	S. 2. 8. 30	M. 39. 11. 24
M. 30. 9. 16	M. 30. 2. 28	M. 29. 10. 30
M. 31. 6. 15	M. 30. 8. 29	M. 31. 12. 6
M. 41. 9. 14	S. 7. 8. 20	T. 10. 10. 13
M. 30. 2. 28	M. 30. 2. 28	M. 30. 8. 29

トスケッチ・紀行文教材

作 品 名	類 度 数	学年別採録数	採録時期	年 初 探 録	作 品 発 表	作 品 出 版
千曲川のスケッチ	80	1	明治	T. 3. 10. 30	T. 1. 8. 10	T. 1. 12. 20
〇落葉一、へ毎年十月の：V二、へ十一月に入って：V	30	2	大正	T. 7. 1. 14	T. 3. 5. 30	T. 4. 1. 10
三、へ木枯が吹いて来た：V	80	3	昭和		T. 2. 8. 27	
〇収獲		2				
〇山上の春		7				
〇麦畠		23				
〇小春の岡辺		14				
〇春の先駆		1				
〇松林の奥		4				
〇九月の田圃道		5				
〇鳥帽子山麓の牧場						
フランスだより(上)	40	3				
〇巴里の五月へ山羊の乳を死りに来る：V	16	2				

○エトランゼエ：△エトランゼエ：V
 ○再び巴里の旅窓にて△都市としての：V

フランスだより(下)

○春を待ちつゝ△温暖い雨が：V

海へ

○海へ△光と熱と夢のない眠のねがひ：V
 △海は微笑んだV

○故国を見るまで△いよいよ明日は赤道：V
 ○故国に帰りて△黒潮に乗って：V

△流れよ：V
 △水夫らよ：V

山陰土産

△大乘寺は：V
 △大社に着いた。：V

エトランゼエ△マルセイユの：V

落梅集

○利根川だより△ことしの春は雨多く：V

12		2		(2)(2)		7		(22)		(7)		(15)		45		(4)		9	
2	10	2	0			7	0					25	20			7	2		
1	5	2										2	4	(1)		1			
1	4					2						9	9	(3)		2	2		
	1					2						11	5			4			
						3						2	1						
												1	1						
	4																		
																5	1		
2	2											9	7				1		
	2					2						5	6			2			
	1	2				3						7	5						
	1					1						3	2						
						1						1							
M.	S.					S.						T.				T.			
42	10					3						12				7			
11	8					8						11				9			
9	10					10						20				28			
M.	T.	T.				S.	S.					T.	T.			T.	T.		
31	11	9				2	2					7	5			4	3		
6	8	9				9	7					4	9			8	9		
10	1	25				18	30					1	5			30	18		
M.	T.					S.						T.				T.			
34	11					2						7				4			
8	9					10						7				12			
25	18					20						10				24			

作 品 名		頻 度 数		学 年 別 採 録 数		採 録 時 期		年 初 採 録		作 品 発 表		作 品 出 版	
飯倉だより		127											
○初学者のために「十七八歳の頃」 ○三人の訪問者「冬」が訪ねて来た。V		(89)											
○樹木の言葉													
○誠実													
市井にありて		88											
○桃「三月の桃の節句は」 ○言葉の術 ○短夜の頃 ○いろはがるた		(35)											
春を待ちつゝ		52											
○前世紀を探求する心「フランスの旅にある頃」 ○太陽の言葉「お早う」と ○春を待ちつゝ ○芭蕉のこと		(13)											
		29	23										
				(21)	32	3		(15)	7	10	1		
		6	2	(14)	29	4		(53)	38	27	2		
		9	3		16	4		(18)	15	10	3		
		(5)	7	4				(3)	3	5	4		
		(8)	7	15					8	4	5		
		1											
			4		2	1			13	15			
		1	9		4				6	8			
		6	6		23	8			15	19			
		18	4		43	2			31	14			
		3			5				6				
		T.			T.				T.				
		14			14				2				
		10			12				11				
		13			28				30				
		T.	T.		S.	T.			T.	T.			
		14	13		5	4			11	7			
		3	1		1	6			7	1			
		5	1		9	1			1	1			
		T.			S.				T.				
		14			5				11				
		3			10				9				
		8			20				5				

桃の華

○人工の翼へ今日も町の空に…
○秋草

浅草だより

○涙と汗へ涙は悲哀を…
○写生 ○外界と自己

葛淵の節句へ国民の記念日でもなく…
送別の詞へ友の立立は…
新体詩人を評す

d 童話教材

作 品 名

をさなものがたり

○書籍へ名もない草が…
○太陽の出る前へ鳥の世界は…
○幸福へ幸福がいろ／＼な家を…
○愚かな馬の話へ良寛上人は…
○東京の言葉へ吉村のお婆さんや…

幼きものに

21		(14)	(22)	75	頻度数	1	1	38	(3)	7	(7)	23	
20	1			50	25	1	1	6	32	0	7	18	5
20	1		(18)	47	21	1		4	27		(3)	7	4
			(4)	3	3	2			4		(2)	2	
					3	3	1	2	1	1	(2)	5	1
					4	4	1					4	
					5	5			(3)	6			
7							1	1					
3				11	6				1				
1				9	11			6		2			
4	1			6	4			13		4			
5				22	4			4	11	1		16	4
				2				2	1			2	1
T. 7. 11. 3				T. 13. 9. 10		年初採録日	T. 6. 1. 17	T. 10. 1. 20	T. 15. 10. 23	S. 4. 7. 13		S. 11. 7. 19	
						年月日				T. 2. 3. 1	M. 39. 6.	S. 11. 1. 1	T. 7. 4. 10
T. 6. 4. 24				T. 13. 1. 5		年月日		T. 15. 2. 5		T. 2. 4. 25	M. 42. 9. 22	S. 11. 6. 5	

e 小説教材

微風				夜明け前				嵐				作品名	頻度数	
△田山忠孝が長崎の港を…△ △漸く…さうだ、漸く半蔵は…△ △旧曆九月も…△ △水戸浪士の西下が…△				○三人△お前が私達と…△ ○子に送る手紙△大震災のあった日 から…△ △次郎は私の前に…△ △太郎の家…△ ○嵐△茶の間の柱…△				32		(10)			3	9
3	0	3		12	9	3		(6)	3	3	1	学年別採録数		
		3				1		(1)	7	3	2			
				3					4	3	3			
				2	1			(2)	2		4			
				4	1			(1)	7		5			
明治													採録時期	
大正														
1									2					
1				2					8	5				
1				6	3				6	2				
				1					7	2				
T				S				S				年初		
14				9				14	7			月採		
9				7				10	11			日録		
18				5				20	19			29		
				S完S	S	S						作品		
				10	7	4						年		
				11	1	4						月		
				25	20	1						日		
T				S								作品		
2				10								年		
4				11								月		
18				25								日		

○日本の言葉△「父さん、仏蘭西では…」△		(9)
ふるさと	10	8
ふるさと	(6)	2
○ふるさとの言葉△山や林は父さんの…△		(9)
(6)	8	2
S	2	
	8	
	29	
T	9	
	12	
	1	

○幼き日△少年の私が…V (初旅)

△早く夕飯のすんだ…V

緑葉集

○朝飯△復た五月が来た。…V

○家畜△短い鼠色の毛…V

f 消息文教材

秋	涼	5	0	5	3	2	3	2	S. 7. 9. 3	M. 31. 9. 24
---	---	---	---	---	---	---	---	---	------------	--------------

		2	1	1	1	1	1	1	S. 3. 10. 31	M. 40. 1. 1
--	--	---	---	---	---	---	---	---	--------------	-------------

aは、詩教材37編の中から、18編を頻度数によってとりあげた表である。

まず、作品別では、「晩春の別離」、「千曲川旅情の歌」の頻度のきわめて高いことがわかる。

学校別では、「曉の誕生」、「おえふ」、「鳥なき里」などが、中学校では全く採りあげられていないことに気がつく。このことは、これらの詩が女学校だけにふさわしい教材性をもつと考えられていたことを示している。ほかに、「千曲川旅情の歌」や「椰子の実」は、女学校に比較的多く、逆に、「常磐樹」、「秋風の歌」、「労働雑詠」などは、中学校に多く採りあげられてきたことを示している。

学年別では、「晩春の別離」が四・五年に、「千曲川旅情の歌」が三年に、「椰子の実」が二年に、「問答の歌」が一年に、主として採りあげられており、それぞれ、相当学年にふさわしい文芸性をもつものと考えられてきたことを示している。

時期別に見ていくと、「晩春の別離」、「椰子の実」、「春の曲」、「舟路」などが教材として長い生命を保っていることに気づく。一面、「曉の誕生」、「問答の歌」、「鳥なき里」、「二つの泉」、「春やいづこに」などは、明治・大正期に多く、昭和期にはいつて全く採りあげられていないことがわかる。逆に、「千曲川旅情の歌」、「響りりん」、「潮音」、「秋風の歌」などは、作品発表からかなり時代を経て採りあげられており、大正後期以後に教材としての価値が見いだされたことを示している。また「おえふ」、「懐古」などは、時代思潮を反映して採りあげられたものともいえそうである。

このスケッチ・紀行文教材では、ほぼ、「千曲川のスケッチ」、「フランスだより」(上・下)、「海へ」から採りあげられている。「千曲川のスケッチ」からは、△落葉V(一・二・三)が、また「フランスだより」からは、△巴里の五月Vが多く採りあげられて

いる。

この種の作品は、ほとんどが低学年むきの教材として採りあげられている。このことは、これらの作品によって未知の世界を紹介し、目をひらかせようとする編者たちの意図を示しているように思われる。

また、作品の発表から比較的近い時期に、教材として採りあげられている点から、藤村の紀行文に対する当時の評価がうかがえる。

cの感想・評論文教材では、「飯倉だより」が、——なかでも入初学者のためにVが——ぬきんでて多い。藤村の感想集は、解説的なもの、随想的なもの、思想性をもつもの、としてとらえることができる。入初学者のためにVのばあいは、それらすべての要素を含み、自己の体験を通して語りかけてくる点で、この時期の生徒たちにふさわしい教材とみられていたのではなからうか。

時期別にみると、大正末年以降に採りあげられていることに気がつく。このことは、作品の発表年代にもよるが、大正十三年の教授要目改正に伴なう、現代文教材重視の傾向を示しているものもある。

d 童話は、藤村が子どもたちに語りかけた、その成立の過程からいっても教材性をもっているといえる。したがって、大正末期以後、低学年向きの教材として高い頻度数を示している。

童話教材としては、「をさなものがたり」が最も多く採りあげられている。しかも、女学校教材に多いことが目だっている。女学校教材としては、ほかに、ことばに関する話——日本の言葉（幼きも

のに）、東京の言葉（をさなものがたり）、ふるさとの言葉（ふるさと）——がめだっている。

e 小説からは、「緑葉集」、「微風」、「嵐」、「夜明け前」の一部が採られている。

ここでは、長編小説の採りあげかたが少ないことに気づく。「夜明け前」の扱いにしても、ひとつのエピソードを中心に短編的な採りあげかたになっている。このことは、分量とも関係をもっているが、当時の編者たちの教科書観の問題にかかわっているように思える。

f 最後の消息文教材では、候文消息の範を示すというより、諏訪湖やいなかの風情を趣深く描いた文芸的要素に力点がおかれている。このことは、文芸研究教育期における教材観の一面を示すものとして興味深い。

以上、採録状況を、作品別・学校別・学年別・時期別にとらえて考察を進めてきた。

次に一種類の教科書における採録の状況をとりあげてみよう。

二、一教科書における採録状況の例

教科書名	編集者名	巻・課・課名	作 品 (出典) 名	発行所名 発行年月日
(イ) 新日本読本 (全十冊)	吉沢義則編	巻三 16 / 27 熱帯の海 巻四 12 / 27 文章の道 24 / 27 春は来ぬ 巻五 14 / 27 旅ごころ 巻六 26 / 28 文学に志した 頃 巻七 9 / 23 晩春の別離 巻八 22 / 23 前世紀を探究 する心 巻十 8 / 23 寂寥	△船は印度の南端を過ぎた…V (海へ) 「椰子の実」 (藤村詩集) △十七、八歳：信州の…同じ頃…浅草のV (飯倉だより) △春は来ぬV (藤村詩集) △響りんくくV () △私が白金の…V (飯倉だより) △時は暮行く…V (藤村詩集) △フランスの旅…V (春を待ちつゝ) △岸の柳は低くして…V (藤村詩集)	修文館 T. 14. 10. 13
(ロ) 訂改 中等新読本 (全十冊)	藤村作編	巻一 4 / 30 春の曲 14 / 30 明星 30 / 30 日本だ 巻二 27 / 27 初学者のため に 巻三 18 / 30 二つの泉 巻四 24 / 30 椰子の爽 巻五 6 / 27 晩春の別離 14 / 27 巴里にて	△うてや鼓の…V (藤村詩集) △浮かべる雲と身をなして…V () △黒潮に乗って私は…V (海へ) △十七、八歳のころ…V (飯倉だより) △自然の母の…V (藤村詩集) △名も知らぬ…V () △時は暮行く…V () △東北大学の…V (フランスだより上)	大日本図書 T. 14. 11. 12
(ハ) 中等 新国文 (全十冊)	三省堂編輯部編	巻一 1 / 32 鶏の高なき 3 / 32 竹の子 15 / 32 茶の間の柱 巻二 7 / 27 落葉 巻三 5 / 32 文章の道 7 / 32 菖蒲	△鳥の世界は…V (をきなものたり) △ある所に空屋…V () △子供らは古い時計…V (風) △毎年十月の二十日といへば…V (千曲川のスケッチ) △十七、八歳のころ…V (飯倉だより) △国民の記念日でもなく…V (藤村読本)	S. 4. 7. 13 三省堂

<p>国語 (全十冊)</p>	<p>岩波編輯部編</p>	<p>卷四7(27)の2(2)椰子の奥 卷五2(33)古城のほとり 卷六8(36)常磐樹 卷十6(26)断想十篇</p>	<p>△名も知らぬ……▽ △小諸なる……▽ △あら雄々しきかな▽ (うち五編)△俳人に流行と不易の説▽△句を作るには▽△古い伝説によると▽△すべてのものは過去りつゝある▽△涙は悲哀を隠し▽ (春を待ちつゝ) (飯倉・浅倉だより)</p>	<p>S. 9. 8. 5 岩波書店</p>
<p>子女 新国語読本 第二版</p>	<p>沢鶴久孝 木枝増一共編</p>	<p>卷一4(25)言葉の愛 卷二5(22)落葉 卷三2(21)湖の音 卷四1(24)初旅 卷五22(23)隅田川の水 卷七1(22)結晶の力 卷八2(20)巴里通信</p>	<p>一、言葉の愛△「父さん」と▽ (幼きものに) 二、ふるさとの言葉△山や林は父さんの▽ (ふるさと) 三、東京の言葉△吉村のお婆さんや▽ (をさなものがたり) △三月の桃の節句は▽ (市井にありて) △い、犬も道を知る▽ (市井にありて) △十七八歳の頃▽ (飯倉だより) △毎日よく降った▽ (市井にありて) △小諸なる古域のほとり▽ (藤村詩集) △時は暮れ行く春よりぞ▽ (市井にありて) △東の空のはのほと▽ (市井にありて)</p>	<p>S. 7. 7. 30 S. 10. 8. 3 訂正三版 修文館</p>

大正末年より昭和にかけての五種類の教科書を探りあげて表示してみると、藤村作品がきわめて多いことに気づく。

それぞれの教科書の特徴としては、(1)では、二年以降に採りあげられていること、(2)では、はじめの五冊に集中していること、(3)では、ほぼ前半におかれていることがあげられる。また、(4)では、四年までに、文学史的展開にそって編まれていることがわかる。そして、(5)においては、低学年では童話集から、中学年では感想集から、高学年では詩集からと全巻にわたって採りあげられている。

これらを、単元構成の現行教科書と比べてみると、単元の中では解説なども必要となるのに対して、戦前の雑纂型の教科書のはあいは、素材だけを探りあげただけに、藤村の作品などは、きわめて採りあげやすかったとも考えられる。

三、以上の考察を通じて、藤村の作品の中では、恋愛詩と自然主義的傾向の小説が全く採りあげられていないことに気がつく。そして、詩教材の面では、詩のローマン性・抒情性が重くみられ、散文教材の面では、小説は短編として扱われているにすぎないといえそうである。つまり、教材史からみた島崎藤村は、ローマン詩人・エッセイストとして採りあげられてきたといえるのである。

一方、藤村の作品が、明治期から昭和の現在に至るまで、教材として長い生命を保ってきたゆえんはどこにあるのだろうか。私は、それを、人生の文学Ⅴという点に見いだせるように思う。「春」の結びのAあり、自分のやうなものでも、どうかして生きたい。Ⅴとということばが、藤村作品の教材価値を象徴的に表わしているように思われる。

以上の考察のうえにたつて、私自身は、なぜこの学年にこの作品が採りあげられてきたかという問題について考察をすすめたいと思っている。そしてこの課題は、個々の藤村作品の分析によって明らかにしていきたい。

四、最後に教科書別採録状況を掲げる。

A 中学校読本採録状況

訂改	訂修	訂新	訂再			正訂
中等国語読本 全十卷	中等国語読本 全十卷(三、 六、七、八、 九欠本)	中等国語読本 全十卷 落合直文編 森林太郎補 萩野由之補	中等国語読本 全十卷 落合直文編	〃	〃	中学国語読本 全五卷 三土忠造編
〃	〃	〃	明治書院	〃	〃	金港堂
△卷二25(34)果物問答	△卷二24(27)果物問答	△卷二25(30)植物問答	△卷一9(20)植物問答 △卷五10(27)舟路 △卷八9(28)豊ある驛	△卷一7(56)唐辛 △卷二12(52)ゆく春 △卷三5(51)春の曲 △卷四9(41)晩春の別離	△卷一7(56)唐辛 △卷二12(51)ゆく春 △卷三4(50)春の曲 △卷四9(43)晩春の別離	△卷一7(56)唐辛 △卷二12(51)ゆく春 △卷三4(50)春の曲 △卷四9(43)晩春の別離
「梅は酸くして…」 (藤村詩集)	「梅は酸くして…」 (藤村詩集)	「梅は酸くして…」 (藤村詩集)	「梅は酸くして…」 「海にして響く…」 「磯の香たかし瑞巖寺」 (シ) (ク)	「梅は酸くして梅の樹の」 「かすみのかけにもえいでし」 「うてや鼓の春の音」 「時は暮れゆく春よりぞ」 (ク) (ク)	「梅は酸くして梅の樹の」 「かすみのかけにもえいでし」 「うてや鼓の春の音」 「時は暮れゆく春よりぞ」 (シ) (ク)	「梅は酸くして梅の樹の」 「かすみのかけにもえいでし」 「うてや鼓の春の音」 「時は暮れゆく春よりぞ」 (シ) (ク)
	ごい1	ごい1		ごい12		
T T M 2 2 45 1210 1 828 改訂 改訂再版	M M 44 41 10 11 18 11 18 4 修訂 改訂 再訂 再訂	M M 41 39 11 2 4 20 新訂 改訂 再訂 再訂	M M 38 36 11 11 18 27 改訂 改訂 改訂 改訂	M 40 9 25 四版		M M M 34 35 39 12 2 12 6 25 11 6 再版 三版
						備考 発行年月日

訂再 明治読本 全十卷	訂再 明治読本 全十卷	中等 教科 明治読本 訂正 全十卷	中等 教科 明治読本 全十卷	中学 国語 全十卷	中学 帝國読本 全十卷	中国語 教科書 全十卷
			芳賀矢一編	鈴木静編	武島又次 郎編	和田方吉編
			富山房	目黒書店	金港堂	文学社
△卷一 19 29 利根川の はとり △卷二 7 29 問答の歌 △卷三 5 31 春の曲 △卷九 晚春の別離	△卷一 19 29 利根川の はとり △卷二 7 29 問答の歌 △卷五 5 31 春の曲 △卷九 12 33 晚春の別 離	△卷二 9 28 問答の歌 △卷五 4 28 春の曲 △卷九 3 28 晚春の別 離	△卷二 9 28 問答の歌 △卷五 4 28 春の曲 △卷九 3 28 晚春の別 離	△卷三 5 29 晚春の別 離	△卷九 6 19 二つの声	△卷十 9 25 世々の歌 集
「ことし春は雨多く…… り六V」 〔梅は酸くして……〕 〔うてや鼓……〕 〔時は暮れゆく……〕	「ことしの春は雨多く…… 六V」 〔梅は酸くして……〕 〔うてや鼓の……〕 〔時は暮れゆく……〕	「梅は酸くして……」 〔うてや鼓の……〕 〔時は暮れゆく……〕	「梅は酸くして……」 〔うてや鼓の……〕 〔時は暮れゆく……〕	「時は暮れゆく……」	朝、入たれか聞くらん…V 暮入たわか聞くらん…V	「それ代々の歌集を観るに」 (藤村詩集)
(藤村詩集) (藤村詩集)	(藤村詩集) (藤村詩集)	(藤村詩集)	(藤村詩集)	(藤村詩集)	(藤村詩集)	
20						
M 43 M 42 M 40 訂正再版 訂正再版 再訂四版	M 42 再訂三版	MMM 393988 訂正改版 訂正改版	M 38 11 15	M 37 12 11	M 35 12 18	M 39 訂正再版 MM 3635 訂正再版 訂正再版

学中国文教科書 全十卷	学中国文教科書 全十卷	学中国文教科書 修正八版 全十卷	学中国文教科書 修正六版 全十卷	学中国文教科書 全十卷	学中国文教科書 全十卷
◇	◇	◇	◇	◇	吉田弥平編
◇	◇	◇	◇	◇	光風館
△卷四三、26 棕櫚と颯 △卷二 26 川道遙 △卷三 17、28 巴里より △卷四 23、26 棕櫚と颯	△卷六 17、26 鶯 △卷十四 18 平和の巴里 △卷一 2、32 川道遙 △卷三 17、28 巴里より	△卷三 1、30 川道遙 △卷四 8、28 船路 △卷五 49、28 晩春の別離 △卷六 19、26 鶯	△卷六 7、27 常磐樹 △卷六 17、27 常磐樹	△卷六 17、27 常磐樹	△卷六 17、27 常磐樹
「棕櫚・たうたう春の雪がきた」 (飯倉だより)	「今年の春は雨多く八利根川だより」 (藤村詩集) 「暖かい雨が降って来るやうになりまし た」 (戦争と巴里)	「海にして響く……」 (シ) 「時は暮れゆく春よりぞ」 (シ) 「さばれ空しきさへづりは……」 (ク) 「都市としての広さから言へば」 (平和の巴里)	「あら雄々しきかな……」 (藤村詩集)	「あら雄々しきかな……」 (藤村詩集)	「あら雄々しきかな……」 (藤村詩集)
注 21	注 14				
T. 14. 10. 28 修正十六版	T. 12. 10. 18 修正十五版	T. 2. 12. 23 修正七版	M. 45. 2. 26 修正六版	M. 44. 12. 15 修正五版	M. 39. 10. 18 M. 43. 11. 5 修正三版

中 学 国 文 教 科 書 全 十 卷 (卷三・四欠本)	中 学 国 文 教 科 書 全 十 卷	中 学 国 文 教 科 書 全 十 卷	中 学 国 文 教 科 書 全 十 卷	中 学 国 文 教 科 書 全 十 卷
吉田歌平編 石井庄司補	♪	♪	♪	♪
♪	♪	♪	♪	♪
△卷六(6) 26朝 △卷二(4) 28秋草 △卷六(6) 26朝	△卷一(8) 28菖蒲の節 △卷三(6) 24元禄渡来の商人 △卷六(6) 26朝 △卷十(13) 20秋風の歌	△卷一(9) 28菖蒲の節 △卷六(6) 27朝 △卷八(9) 20常磐木 △卷十(12) 20秋風の歌	△卷一(9) 28菖蒲の節 △卷六(6) 27朝 △卷八(9) 20常磐木 △卷十(12) 20秋風の歌	△卷六(27) 28平和の巴里 △卷七(1) 27太陽の言葉 △卷八(17) 28常磐木
「朝は再び此処にあり」 (藤村詩集)	「国民の記念日でもなく……」 (藤村読本) 「過日わたしはものほしに……」 (桃の掬) 「朝はふたたび……」 (藤村詩集)	「国民の記念日でもなく……」 (藤村読本) 「朝はふたたび……」 (藤村詩集) 「あら雄々しきかな……」 (ク) 「しづかにきたる……」 (ク)	「国民の記念日でもなく……」 (藤村読本) 「朝はふたたび……」 (藤村詩集) 「あら雄々しきかな……」 (ク) 「しづかにきたる秋風の……」 (ク)	「都市としての広さから言へば……」 (平和の巴里) 「『お早う』とわたしは……」 (春を待ちつつ) 「あら雄々しきかな……」 (藤村詩集)
注16	注21	注6	注7	注7
S. 16. 10. 17 修正三版	S. 12. 8. 30 S. 13. 2. 25 修正再版	S. 9. 12. 18 修正二十三版	S. 9. 8. 8 修正二十二版	S. 9. 8. 8 修正二十二版

中等 教科 日本読本 全十巻	保科孝一編 鐘美堂	△巻十13、20秋風の歌	「しづかにきたる…」 (ク)
中学新読本 全五巻	坪内雄藏編 明治図書	△巻六21、25うぐひす △巻七22、23高山に登りて遠く望む歌 △巻九2、23晩春の別離	「さばれ空しきさへづりは…」 〔藤村詩集〕 〔ク〕 〔ク〕 〔ク〕
正訂 中学新読本	〃	△巻三6、48春の曲	「うてや鼓の…」 〔藤村詩集〕
新 国語教本 全十巻	藤岡作太郎編 大阪開成館	△巻三6、48春の曲 △巻九15、28漁夫	「うてや鼓の…」 〔藤村詩集〕 「ふみ月夏の海の香の…」 〔藤村詩集〕
新定 中学読本 全十巻	芳賀矢一編 富山房	△巻一2、32初春の歌 △巻三8、30舟路 △巻五25、31椰子の実 △巻六20、31常磐樹	「春は来ぬ…」 〔藤村詩集〕 〔ク〕 〔ク〕 〔ク〕 「春は来ぬ…」 〔藤村詩集〕 〔ク〕 〔ク〕 〔ク〕
訂 新定 中学読本 全十巻	〃	△巻一2、32初春の歌 △巻三8、30舟路 △巻五25、31椰子の実 △巻六20、31常磐樹	「春は来ぬ…」 〔藤村詩集〕 〔ク〕 〔ク〕 〔ク〕 「春は来ぬ…」 〔藤村詩集〕 〔ク〕 〔ク〕 〔ク〕
国文読本 全十巻	国語漢文 研究会編 自治館	△巻三19、28船路 △巻五2、27春の曲	「海にして響く…」 〔藤村詩集〕 〔ク〕 〔ク〕
新編 国文読本 全十巻	啓成社編 啓成社	△巻一9、35利根川のほとり	「ことしの春は雨多く…」 〔藤村詩集〕

	新編国文読本 全十卷	〃		△卷二、26、40問答の歌	「梅は酸くして……」	(藤村詩集)				
	新撰国語読本 全十卷	坪内雄藏編	富山房	△卷五、4、25春の曲	「うてや鼓の……」	(藤村詩集)				
	新撰国語読本 全十卷	〃	〃	△卷五、4、25春の曲	「うてや鼓の……」	(藤村詩集)				
	中学国語読本 全十卷	関根正直 深井鑑一郎編	宝文館	△卷五、19、28問答の歌	「梅はすくして……」	(藤村詩集)	漢字 1		T. 1. 10. 18	
	新撰国語読本 全十卷	佐々政一編	明治書院	△卷五、1、27春の曲 △卷七、10、24晩春の別 離	「うてや鼓の……」 「時は暮れゆく……」	(藤村詩集)	注8		T. 1. 10. 26	
	訂修 新撰国語読本 全十卷	〃	〃	△卷五、2、25春の曲 △卷六、3、26エトラン ゼエ △卷七、9、26晩春の別 離	「うてや鼓の……」 「エトランゼエ……」 「時は暮れゆく……」	(藤村詩集) (平和の巴里) (藤村詩集)	注16		T. 3. 12. 7 改訂再版 T. 6. 10. 28 修訂 T. 7. 1. 14 修訂再版	
	新撰国語読本 昭和一期 全十卷 (巻四―十欠本)	佐々政一編 武島文次郎 杉川種敏 補修	〃	△卷三、2、20利根川の 畔	「今年の春は雨多く……」	(藤村詩集)	注3 絵1		S. 2. 10. 10	
				△卷二、4、49舟路	「海にして響く……」	(藤村詩集)				

<p>新撰国語読本 昭和三年 全十巻</p>	<p>新撰国語読本 改訂版 全十巻</p>	<p>新撰国語読本 新制版 全十巻</p>	<p>大正読本 全十巻</p>	<p>中学 国語教科書 修正 第四版 全十巻(巻七・ 八のみあり)</p>	<p>訂改 中等国文読本 全十巻 (巻四・五・七 八のみあり)</p>
<p>藤村作編</p>	<p>藤村作編</p>	<p>藤村作編</p>	<p>藤村作編</p>	<p>藤村作編</p>	<p>藤村作編</p>
<p>大日本図書</p>	<p>大日本図書</p>	<p>大日本図書</p>	<p>大日本図書</p>	<p>金港堂</p>	<p>金港堂</p>
<p>△巻三 8、29 椰子の実 27、29 初学者の ために △巻六 15、17 千曲川の 畔にて</p>	<p>△巻三 28、28 初学者の ために △巻六 15、17 千曲川旅 情の歌</p>	<p>△巻三 28、28 初学者の ために △巻六 15、17 千曲川旅 情の歌</p>	<p>△巻五 6、28 晩春の別 離</p>	<p>△巻八 4、21 新体詩人 を評す</p>	<p>△巻四 11、32 船路</p>
<p>「名も知らぬ……」 「十七・八歳のころ……信州の小諸にゐた 頃……同じ頃……浅草の……」(飯倉だより) 「昨日また……」 (藤村詩集)</p>	<p>「十七・八歳のころ……信州の……同じ頃…… 浅草の……」 (飯倉だより) 「小諸なる……千曲川の畔にて……」 (藤村詩集)</p>	<p>「十七・八歳のころ……信州の……同じ頃…… 浅草の……」 (飯倉だより) 「小諸なる……千曲川の畔にて……」 (藤村詩集)</p>	<p>「時は暮行く……」 (藤村詩集)</p>	<p>「四五日このかた心地すぐれず引籠り居 り候へば……先頃拝借致候御珍藏の伝奇 などくりひろげお蔭を以て、つれづれ を慰め居り候。」 (書簡集)</p>	<p>「海にして響く……」 (藤村詩集)</p>
<p>作者注 4 絵 1 注 8</p>	<p>作者注 2 注 10</p>	<p>作者注 2 注 10</p>	<p>ごい 6 カット 10</p>	<p>ごい 2</p>	<p>ごい 2</p>
<p>S・10・9・2</p>	<p>S・12・7・27 訂正四版</p>	<p>S・12・7・27 訂正四版</p>	<p>T・1・10・31</p>	<p>T・5・9・28 修正第三版 T・6・17 修正第四版</p>	<p>T・8 訂正四版 T・7 訂正三版 T・5・4 訂正再版 T・11 訂正再版</p>

<p>大正国語読本 第三修正版 全十卷</p>	<p>保科孝一編</p>	<p>育英書院</p>	<p>△卷一 3/32 春の曲 8/32 パリの五月 △卷四 19/30 少年の頃 △卷五 23/26 かりがね △卷六 4/28 旅こゝろ △卷七 3/28 晩春の別離</p>	<p>「うてや鼓の……」 「山羊の乳を……」 「早く夕飯のすんだ黄昏時のことでした。」 「さもあらばあれ駕の……」 「響りんく……」 「時は暮行く……」</p>	<p>(藤村詩集) (平和の巴里) (微風) (藤村詩集) (多)</p>	<p>作者注 5 絵 1 注 9</p> <p>T. 5. 9. 28 T. 5. 12. 25 訂正 T. 7. 12. 15 修正再版 T. 12. 1. 16 第二修正訂正 T. 14. 9. 18 第三修正</p>
<p>帝国読本 全十卷 (卷六のみ)</p>	<p>芳賀矢一編</p>	<p>富山房</p>	<p>△卷六 23/27 小諸なる古城のほとり △卷三 6/30 舟路 △卷四 26/30 春を待ちつつ</p>	<p>「小諸なる……(一)だけ」 「海にして響く……」 「暖い雨がふってくるやうに……」</p>	<p>(藤村詩集) (藤村詩集) (戦争と巴里)</p> <p>注 1 ごい 3</p> <p>T. 6. 1. 8 T. 7. 2. 5 訂正再版</p>	
<p>改訂帝国読本 全十卷 (卷六・七・八・十欠本)</p>	<p>ク</p>	<p>ク</p>	<p>△卷二 10/34 落葉 △卷五 3/28 晩春の別離 4/28 送別の詞 △卷六 2/28 エトランゼ 4/28 旅ごころ</p>	<p>「木枯が吹いて来た。……」 「時は暮れ行く春よりぞ……」 「友の出立はこの水曜日なり。」 「エトランゼといふ言葉は……」 「響りんく……」</p>	<p>(千曲川のスケッチ) (藤村詩集) (ク文集) (平和の巴里) (藤村詩集)</p> <p>注 5 ごい 4</p> <p>T. 7. 12. 13 改訂三版</p>	
<p>中等国文教科書 全十卷 (卷二・五・六のみあり)</p>	<p>松井簡治編</p>	<p>三省堂</p>	<p>△卷四 20/24 懐古</p>	<p>「天の河原に入百万……」</p>	<p>(藤村詩集)</p> <p>作者注 3 注 12</p> <p>T. 9. 10. 26 T. 10. 1. 20 修正再版</p>	

現代国語読本 全十巻	訂改中等国語 教科書 全十巻	中等国文 全十巻	国文新読本 改訂版 全十巻	国文新読本 全十巻
八波則吉編	吉沢義則編	広島高師 国語 漢文教授 研究会編	藤村 鳥津久基 共編	藤村 鳥津久基 作編
東京開成館	修文館	六盟館		至文堂
△巻二 25 / 32 熱帯の海	△巻五 6 / 25 古城のほとり △巻七 12 / 19 晩春の別離	△巻一 4 / 37 春の曲 △巻二 4 / 33 明星 △巻五 8 / 32 晩春の別離	△巻四 9 / 26 麦島 22 / 26 懐古 △巻五 2 / 22 海へ 3 / 22 古城のほとり 19 / 22 落葉	△巻五 3 / 21 古城のほとり △巻六 22 / 23 晩春の別離 △巻七 6 / 17 労働の歌
「船は印度洋の…」 (海へ)	「一、根気 二、先づ自己を正せ 三、試みることは悟ることだ 四、簡素の美 五、音読」 (飯倉だより)	「うてや鼓の…」 (藤村詩集) 「浮べる雲と身をなして…」 (シ) 「時は暮れゆく…」 (シ)	「小諸なる…」 (藤村詩集) 「毎年十月の二十日といへば十一月に入つて…木枯が…」 (千曲川のスケッチ) 「時は暮れ行く…」 (藤村詩集) 「朝はふたたびここにあり」 (シ)	「小諸なる…」 (シ) 「時は暮れ行く…」 (ク) 「朝はふたたびここにあり」 (シ)
	作者注 2 注 12 ごとい 4 語法 1	カット 2	作者注 5 注 6 絵 1	注 6 絵 1
T・12・11・30	T・12・10・30	T・12・8・28	T・14・8・15 訂正四版	T・10・10・16 T・10・12・28 訂正再版 T・12・8・20 訂正三版

<p>現代国語読本 修正版 全十巻</p>	<p>現代国語読本 全十巻</p>	<p>現代国語読本 全十巻</p>	<p>国文新選 全十巻</p>
<p>△巻四 27～30 日本語の恋しさ △巻五 1～24 文学に志した頃 △巻八 2～24 野辺の琥珀</p>	<p>△巻一 7～33 菖蒲の節 △巻二 21～31 文章雑話 △巻五 4～30 太陽の言 △巻七 4～28 晩春の別</p>	<p>△巻一 8～37 菖蒲の節 △巻二 25～36 文章雑話 △巻五 5～32 太陽の言 △巻七 5～31 晩春の別</p>	<p>△巻一 14～25 椰子の災 △巻四 21～24 三人の訪問者 △巻七 1～23 文章の道</p>
<p>「兼好法師曰く……」 （平和の巴里） （自修文） 「私が白金の……」 （飯倉だより） （藤村詩集）</p>	<p>「国民の記念日でもなく……」 （藤村読本） 「一、根気 二、先づ自己を正せ 三、試みることは悟ることだ 四、簡素の美 五、音読（飯倉だより）」 「『お早う』と私は……」（春を待ちつつ） 「時は暮れゆく……」 （藤村詩集）</p>	<p>「国民の記念日でもなく……」 （藤村読本） 「一、根気 二、先づ自己を正せ 三、試みることは悟ることだ 四、簡素の美 五、音読（飯倉だより）」 「『お早う』と私は……」（春を待ちつつ） 「時は暮れゆく……」 （藤村詩集）</p>	<p>「『幸福』がいろ／＼な家を……」 （をさなものがたり） 「名も知らぬ……」 （藤村詩集） 「『冬』が訪ねて来た。『貧が』『老が』『……』」 （飯倉だより） 「一、十七八歳の頃 二、信州の小語に…… 三、同じ頃…… 四、浅草の新片町……」（飯倉だより）</p>
<p>作者注 4 筆 3 絵 14 注 5</p>	<p>作者注 4 絵 9 注 7</p>	<p>作者注 4 絵 9 注 7</p>	<p>作者注 3 注 1 写真 2</p>
<p>T. 12. 11. 30 T. 13. 1. 4 訂正再版 T. 15. 10. 23 修正三版</p>	<p>S. 2. 2. 4 訂正四版 S. 6. 9. 21 修正五版 S. 7. 1. 16 訂正六版 S. 10. 8. 25 修正七版</p>	<p>S. 2. 2. 4 訂正四版 S. 6. 9. 21 修正五版 S. 7. 1. 16 訂正六版 S. 10. 8. 25 修正七版</p>	<p>T. 13. 9. 13</p>

<p>新日本読本 全十卷</p>	<p>訂改 中等新読本 全十卷</p>	<p>国語正読本 全五卷</p>
<p>吉沢義則編</p>	<p>藤村作編</p>	<p>東京高師附 中国語漢文 研究会編</p>
<p>修文館</p>	<p>大日本図書</p>	<p>目黒書店</p>
<p>△卷三 16 / 27 熱帯の海 △卷四 12 / 27 文章の道 △卷五 14 / 27 旅ごころ △卷六 26 / 28 文学に志した頃 △卷七 9 / 23 晩春の別離</p>	<p>△卷一 4 / 30 春の曲 14 / 30 明星 30 / 30 日本だ △卷二 27 / 27 初学者のために △卷三 18 / 30 二つの泉 △卷四 24 / 30 椰子の実 △卷五 6 / 27 晩春の別離 14 / 27 巴里にて</p>	<p>△卷一 4 / 30 パリの五月 5 / 30 愚かな馬の話 △卷二 7 / 26 海路 △卷四 3 / 25 晩春の別離</p>
<p>「船は印度の南端を過ぎた……」 「明けても暮れても……」 「海へ」 「椰子の実、名も知らぬ……」 （藤村詩集） 「一、十七八歳……二、信州の……三、同じ頃……四、浅草の……」 （飯倉だより） 「春は来ぬ……」 （藤村詩集） 「響りん／＼……」 （シ） 「私が白金の……」 （飯倉だより） 「時は暮行く……」 （藤村詩集）</p>	<p>「山羊の乳を……」 （平和の巴里） 「良寛上人は……」 （をさなものがたり） 「いよ／＼明日は赤道に……」 （海へ） 「時は暮行く春よりぞ……」 （藤村詩集） 「うてや鼓の……」 （藤村詩集） 「浮かべる雲と身をなして……」 （シ） 「黒潮に乗って私は一晝夜に……」 （海へ） 「十七八歳の頃……信州の……同じ頃……浅草の……」 （飯倉だより） 「自然の母の乳のしづく……」 （藤村詩集） 「名も知らぬ……」 （シ） 「時は暮行く……」 （シ） 「東北大学の石原君は」 （平和の巴里）</p>	<p>作者注 3 注 4</p>
<p>作者注 7 注 88 こい 6 絵（写真） 11 絵の注 1 筆蹟 3 筆蹟注 2</p>	<p>作者注 5 注 6 こい 8 絵 12</p>	<p>作者注 3 注 4</p>
<p>T. 14. 10. 13</p>	<p>T. 14. 11. 2</p>	<p>T. 13. 9. 27</p>

<p>訂五 新日本読本 全十卷</p>	<p>新日本読本 修正版 全十卷</p>	
<p>〃</p>	<p>〃</p>	
<p>〃</p>	<p>〃</p>	
<p>△卷一 6 26 菖蒲の節 12 26 いろいろはが るた 句 「国民の記念日でもなく……」 (藤村読本)</p> <p>△卷二 5 34 消息三篇 1 3 秋涼「一昨日帰宅致し候処……」 にては単衣に……」(書簡M. 31. 9. 24)</p> <p>△卷四 9 24 文章の道 一「十七八……」二「信州の……」三「同 じ頃……」四「浅草の……」(飯倉だより)</p> <p>△卷五 14 28 短夜の頃 「毎日よく降った」(市井にありて)</p> <p>△卷六 23 27 千曲川旅 情の歌 「小語なる……」(のみ) (落梅集)</p> <p>△卷七 5 23 晩春の別 離(抄) 「時は暮れ行く……」 (藤村詩集)</p>	<p>△卷一 5 27 藤村のは なし 9 27 菖蒲の節 句 「国民の記念日でもなく……」 (藤村読本)</p> <p>△卷三 15 28 波に咲く 花 1 2 椰子の唄 (藤村詩集)</p> <p>△卷四 16 27 文章の道 「一、十七八歳……」二、信州の……」三、同じ 頃……」四、浅草の……」(飯倉だより)</p> <p>△卷五 15 28 旅ごころ 22 27 春は来ぬ 「春は来ぬ……」 (藤村詩集)</p> <p>△卷七 8 23 晩春の別 離 「響りりん……」 (〃)</p> <p>△卷八 19 22 前世紀を 探求する心 「フランスの旅……」(春を待ちつつ)</p>	<p>卷八 22 23 前世紀を探 求する心 「フランス旅……」(以下全部) (春を待ちつつ) (藤村詩集)</p> <p>△卷十 8 23 寂寥 「岸の柳は低くして……」(藤村詩集)</p>
<p>作者注 5 注 10 注 9 絵 4 語句 42</p>	<p>作者注 5 注 41 語句 16 絵 4 絵注 1 筆蹟 2 筆蹟注 1</p>	<p>作者注 5 注 41 語句 16 絵 4 絵注 1 筆蹟 2 筆蹟注 1</p>
<p>S. 3. 11. 5 訂正四版</p> <p>S. 6. 7. 31 訂正五版</p> <p>S. 6. 11. 20 訂正六版</p> <p>S. 9. 7. 28 訂正七版</p>	<p>S. 3. 7. 23 訂正三版</p>	<p>T. 15. 1. 15 訂正再版</p>

<p>中学新国文 全十卷 (巻三欠)</p>	<p>大島庄之助 黒羽英男 共編</p>	<p>金港堂</p>	<p>△巻七五(33) 晩春の別離</p>	<p>「時は暮れゆく……」 (藤村詩集)</p>	<p>作者注 注6</p>	<p>T・14・10・28</p>
<p>中等国語読本 新修一版 全十巻 (巻五・六・九欠本)</p>	<p>落合直文編 金子元臣補</p>	<p>明治書院</p>	<p>△巻一9(35) ドンと時計の全話 △巻四22(27) 早春のスワッチ 24(27) 三人の訪問者</p>	<p>「一つドンのお話をしましょう。」 (をさなものがたり) 一、山上の春「春雨あがりの……」(千曲川のスケッチ) 二、小諸の思ひ出「浅間の麓では」(市井にありて) 「冬」が……「貧」が……「老」が…… (飯倉だより)</p>	<p>作者注2 注1 絵1 ごい9</p>	<p>T・14・12・28</p>
<p>新国文読本 全十巻 (巻八・九・十欠)</p>	<p>千田憲編</p>	<p>右文書院</p>	<p>△巻三(前篇) 23(29) パリーより △巻四(シ) 21(29) 椰子の実 △巻五(ハ・) 16(21) 文学に志した頃 3(21) 小諸なる古城のほとり △巻六(前篇) 15(21) 松島瑞巖寺</p>	<p>「兼好法師曰く……」 (フランスだより) 「名も知らぬ……」 (藤村詩集) 「私が白金の……」 (飯倉だより) 「小諸なる……(一)のみ」 (藤村詩集) 「舟路も遠し……」 (ハ)</p>	<p>作者注4 絵1 注25</p>	<p>T・15・9・23</p>

		△巻三六 41 太陽の言 葉	「お早う」 (春を待ちつつ)		
<p>中学第一読本 全十巻</p>	<p>斉藤清備編 育英書院</p>	<p>△巻一 6 26 茶の間の 柱 △巻二 3 26 玩具は野 にも晶にも △巻三 2 25 隅田川 13 25 烏帽子山 蘆の牧場 △巻五 3 21 太郎の家 8 21 雲のこと △巻七 3 30 落梅集抄</p>	<p>「子供等は……」 「父さんの幼い時のやうに……」 (ふるさと) 「流れよ、流れよ、」 (海へ) 「翌日は、私はB君と二人ぎりです」 (千曲川のスケッチ) 「遠い山地の方に」「私の四畳半に置く」 「四月に入って」「やがて四月の」「中 央線の落合川駅」「太郎には自身：(嵐) 」「小諸は千曲川に沿へる」(藤村詩集) 「○小諸なる古城のほとり○千曲川旅情 (藤村詩集)」</p>	<p>作者注 4 注 26 絵 3 絵の注 5</p>	<p>S. 2. 8. 29</p>
<p>新撰国文読本 全十巻</p>	<p>松井簡治編 三省堂</p>	<p>△巻二 18 30 落葉 27 30 春の先駆 △巻三 7 30 パリーの 五月 19 30 椰子の実 △巻四 18 30 松林の路 △巻五 26 28 秋風の歌</p>	<p>「毎年十月の二十日と……」「十一月に……」 「木桔が……」(千曲川のスケッチ) 「一雨ごとに……美しい。」(タ) 「山羊の乳を……」(平和の巴里) 「名も知らぬ」(藤村詩集) 「静かな松林の中にある……」 (千曲川のスケッチ) 「しづかにきたる秋風の……」(藤村詩集)</p>	<p>作者注 3 絵 2</p>	<p>S. 2. 8. 30</p>
<p>新定国文読本 全五巻</p>	<p>東京高師 附中内師 国語漢文 研究会 目黒書店</p>	<p>△巻一 3 40 春の曲 7 40 パリーの五 月 △巻二 22 39 収獲 △巻三 15 39 響りんり ん</p>	<p>「うてや……」 (藤村詩集) 「山羊の……」 (平和の巴里) 「ある日私は……」(千曲川のスケッチ) 「響りんり……」 (藤村詩集)</p>	<p>作者注 4 注 1 絵 2</p>	<p>S. 3. 5. 5</p>

<p>新制 昭和国語読本 改訂版 全十卷</p>	<p>昭和国語読本 全十卷</p>	<p>新定国文読本 修正版 全五卷</p>
<p>保科孝一編</p>	<p>保科孝一編</p>	<p>保科孝一編</p>
<p>育英書院</p>	<p>育英書院</p>	<p>育英書院</p>
<p>△卷一 3/26 うてや鼓 △卷三 5/23 太郎の家 △卷五 5/21 舟路 △卷六 4/21 文章雑話 20/21 千曲川旅 情の歌</p>	<p>△卷六 6/28 文章雑話 25/28 千曲川旅 情の歌 △卷七 3/25 晩春の別離</p>	<p>△卷四 23/37 常磐木 △卷一 3/46 うてや鼓 7/46 パリの五月 △卷二 22/39 収穫 △卷三 15/39 響りんりん △卷四 23/38 常磐木</p>
<p>「うてや鼓の……」 （藤村詩集） 「四月に入って……太郎には……」 （風） 「海にして」 （藤村詩集） 「十七、八……二、信州の……三、 同じ……」四、「浅草の……」三、 （飯倉だより） 「○小諸なる……○きのふまた……」 （藤村詩集）</p>	<p>「うてや……」 （藤村詩集） 「一月に入つて……」三、「木枯が……」二、「十 月に入つて……」 （千曲川のスケッチ） 「遠い山地の方に……」私の四畳半に…… 「四月に……」やがて四月の…… 「年と つた……」太郎には…… （風） 「十七、八……二、信州の……」三、「同 じ頃」四、「浅草の……」 （飯倉だより） 「○小諸なる……○きのふまた……」 （藤村詩集） 「時は……」 （〆）</p>	<p>「あら雄々しきかな……」 （〆） 「うてや……」 （藤村詩集） 「山羊の……」 （フランスだより） 「ある日私は……」 （千曲川のスケッチ） 「響りんく……」 （藤村詩集） 「あら雄々しきかな……」 （〆）</p>
<p>作者注 4 注 10 語句 18 絵 8</p>	<p>作者注 5 注 19 絵 9</p>	<p>作者注 4 注 1 絵 2</p>
<p>S. 6. 8. 10 S. 6. 12. 15 S. 12. 8. 7 修正再版 改訂版</p>	<p>S. 3. 8. 7 S. 3. 12. 10 T. 14. 11. 28 T. 5. 9. 28 T. 12. 1. 16 第二修正版 第三修正版 第四修正版</p>	<p>S. 3. 5. 5 S. 3. 10. 18 訂正再版 S. 6. 10. 15 修正版 S. 7. 8. 15 修正再版</p>

<p>国文読本 全十巻</p>	<p>吉田弥平編</p>	<p>光風館</p>	<p>△巻二13 20落葉 △巻七1 20隅田の水 △巻八2 20揚げよ勝<small>関</small></p>	<p>「揚げよ勝開手を伸べて」 (藤村詩集)</p>	<p>注17 絵10 S. 3. 9. 28</p>
<p>昭和 国語読本 (巻一・二のみ) 全十巻</p>	<p>笹川種郎編 関根正直編</p>	<p>帝国書院</p>	<p>△巻二23 30燦爛のは とり</p>	<p>「二月に入ってから…」 (フランスだより)</p>	<p>注2 絵1 S. 3. 9. 26</p>
<p>国文 中学 校用 全十五巻</p>	<p>富山房編 韓部編</p>	<p>富山房</p>	<p>△巻一 中編24 25幸福 △巻二 前篇6 23文章の道 中々12 25小春の丘辺 後々15 15書籟</p>	<p>「幸福が……」(をさなものがたり) 「信州の……同じ頃……浅草の……」(飯倉だより) 「国民の……ちまき」(藤村読本) 「風の少い……」(千曲川のスケッチ) 「名もない……」「講堂に近い所に……」(をさなものがたり)</p>	<p>注26 絵1 S. 3. 9. 4</p>
<p>新選中等国文 全十巻</p>	<p>藤村作編 鳥津久基編</p>	<p>至文堂</p>	<p>△巻一10 31菖蒲 △巻三27 30響りんりん音りんく △巻四13 30懷古 26 30一茶の生涯 △巻五5 29晩春の別離 △巻六30 31古城のほとり</p>	<p>「国民の……奥の細道」(藤村読本) 「響りんく」(藤村詩集) 「天の河原に入百万」(藤村詩集) 「古大家の生活」(春を待ちつつ) 「時は暮れ行く」(藤村詩集) 「小諸なる……」(シ)</p>	<p>注1 絵1 S. 3. 8. 23</p>
			<p>△巻7 22高山に登りて遠く望むの歌</p>	<p>「高根に……」(シ)</p>	

新撰読本 全五卷	永井俊編	工業書房	△卷二1、23 巴里の五月	「山羊の……」 (フランスだより)	作者注	S. 4. 4. 4
新制中等新国文 全十卷 (一―三欠本)	・	・	△卷四25、25 文章の道 △卷五2、25 古城のほとり	「十七、八歳の頃……」 「小諸なる……」 (飯倉だより) (藤村詩集)	作者注2 注11	S. 10. 10. 16 訂正八版 S. 12. 7. 31 訂正九版
改正中等新国文 全十卷	三矢重松編 鳥野幸次 折口信夫 補訂	文学社	△卷一5、25 菖蒲の節句 △卷四25、25 文章の道 △卷五2、25 古城のほとり	「国民の記念日でも……」 「十七、八歳の頃……」 「小諸なる……」 (藤村読本) (飯倉だより) (藤村詩集)	作者注3 注15 絵5 ごい6	S. 9. 12. 3 訂正七版 S. 4. 2. 18 訂正六版 T. 10. 10. 24
訂改 中等国文 全十卷	・	・	△卷一13、32 菖蒲 △卷四21、27 文章の道 22、27小諸なる 古城のほとり	「国民の……」 「十七、八歳の……」 「小諸なる古城のほとり」 (藤村読本) (信州の……同じ：浅草の……) (飯倉だより) (藤村詩集)	作者注2 注17 絵1 ごい14	S. 3. 3. 10. 16 S. 4. 2. 28 訂正再版 S. 7. 9. 10 訂正三版
中等国文 全十卷 (卷五―十欠本)	藤井乙男編	金港堂	△卷一10、31 菖蒲 11、31巴里の五月 △卷三22、29 故国へ △卷四17、30 スエズ運河 24、30小諸なる 古城のほとり	「国民の……」 「山羊の乳を……」 「黒潮に……水夫等よ……」 「海は微笑んだ……」 「小諸なる……」 (藤村読本) (フランスだより) (海へ) (シ) (藤村詩集)	作者注3 注14 注の絵4 絵8 ごい26	S. 3. 3. 10. 20 S. 4. 2. 28 訂正再版
			△卷九4、20 晩春の別離	「時は……」 (シ)		

<p>純正国語読本 改訂版 全十巻</p>	<p>純正国語読本 全十巻</p>	<p>新 等 国 文 全十巻</p>
	<p>五十嵐力編</p>	<p>三省堂編 編輯部編</p>
<p>早稲田図書 出版 社</p>	<p>早稲田大学 出版 部</p>	<p>三省堂</p>
<p>△巻一 7 24 菖蒲の節 供 8 24 苺 △巻四 21 25 扁朝 △巻五 11 29 舟路</p>	<p>△巻四 24 27 扁朝 △巻五 11 30 舟路 △巻十 4 24 芭蕉の事</p>	<p>△巻一 1 32 鶏の-highな き 3 32 竹の子 15 32 茶の間の 柱 △巻二 7 27 落葉 △巻三 5 32 文章の道 7 32 菖蒲 △巻四 7 27 の 2 2 椰子の実 △巻五 2 33 古城のほ とり △巻六 8 36 常磐木 △巻十 6 26 断想十篇</p>
<p>「国民の記念日でもなく……」 〔藤村読本〕 「初夏と梅雨を思ふと……」 〔野草集〕 「新嘉波まで帰れば……」 〔海へ〕 「海にして響く……」 〔藤村詩集〕</p>	<p>「新嘉波まで帰れば……」 〔海へ〕 「海にして……」 〔藤村詩集〕 「芭蕉の生涯は……」 〔春を待ちつゝ〕</p>	<p>「鳥の世界は……」 〔をさなものがたり〕 「ある所に空屋……」 〔〇〕 「子供等は古い時計……」 〔〇〕 「毎月十月の二十日といへば……」 〔千曲川のスケッチ〕 「十七、八歳の頃……」 〔飯倉だより〕 「国民の記念日でもなく……」 〔藤村読本〕 「名も知らぬ……」 〔藤村詩集〕 「小諸なる……」 〔〇〕 「あら雄々しきかな」 〔〇〕 「うち五篇」 〔俳人に流行と……〕 「句を作るには……」 〔古い伝説によると……〕 「春を待ちつゝ」 〔すべてのものは過去りつゝある……〕 「涙は悲哀を……」 〔飯倉だより〕 「涙は悲哀を……」 〔浅草だより〕</p>
<p>作者注 4 注 9 文節 18 7</p>	<p>作者注 2 注 11 文節 8 11 12</p>	<p>注 7 絵 17</p>
<p>S・4・8・10 S・4・12・9 訂正再版 S・7・10・18 訂正三版</p>	<p>S・4・8・13</p>	<p>S・4・7・13</p>

<p>昭和 新 国文 全十卷</p>	<p>国文選 第二版 全十卷</p>	<p>国文選 全十卷</p>	<p>標準中学読本 全五卷 (巻一、二欠本) 会編</p>	<p>三省堂編 輯所編</p>	<p>〃</p>	<p>垣内松三編</p>	<p>国学院大学 内国語研究</p>
<p>三省堂</p>	<p>〃</p>	<p>明治書院</p>	<p>中文館</p>	<p>△巻一 1 33 鶏の高な き 3 33 竹の子 16 33 茶の間の 柱 △巻二 7 27 落葉</p>	<p>△巻一 1 28 太陽の出 る前 △巻四 19 23 小諸なる 古城のほとり △巻五 1 22 文章の道 △巻十 12 18 春を待ち つゝ</p>	<p>△巻一 1 23 小さな旅 人 △巻三 10 21 海の旅 △巻四 5 22 小諸なる 古城のほとり △巻五 1 19 文章の道 △巻十 14 16 春を待ち つゝ</p>	<p>△三学年 3 50 千曲川の旅情</p>
<p>「鳥の世界は……」 (をさなものがたり) 「ある所に空屋が……」 「子供等は古い時計の……驚くことさへ ある。」 〔(風) 毎年の十月の……十月末の……十一月に…… 木枯……〕 (千曲川のスケッチ)</p>	<p>「鳥の世界は暗くて……」 (をさなものがたり) 「小諸なる……」 (藤村詩集) 「十七、八歳の頃……」 (飯倉だより) 「フランスの旅にある頃……」 (春を待ちつゝ)</p>	<p>「名もない草が……」 (をさなものがたり) 「船は印度の……」 (海へ) 「小諸なる……」 (藤村詩集) 「十七、八歳の頃……」 (飯倉だより) 「フランスの旅にある頃……」 (春を待ちつゝ)</p>	<p>「小諸なる……」 (一) (二) (藤村詩集)</p>	<p>注 絵 14 8</p>	<p>注 作者注 4 32</p>	<p>注 作者注 4 文節 18 ごい 15 58</p>	<p>注 作者注 1 ごい 3 2</p>
<p>S. 5. 8. 5</p>	<p>S. 8. 7. 31</p>	<p>S. 5. 6. 26</p>	<p>S. 4. 11. 29</p>	<p>写真 1</p>	<p>訂正 五版</p>	<p>訂正 四版</p>	<p>訂正 八版</p>

<p>国語読本 第五版 全五卷</p>	<p>国語読本 全十卷</p>	<p>訂改 中等新国文 全十卷</p>	
<p>垣内松三編 飛田隆編</p>	<p>垣内松三編 古城貞吉編</p>	<p>藤村作編 島津久基編</p>	
	<p>六星館</p>	<p>至文堂</p>	
<p>△卷二 1 35 文章の道 △卷三 27 35 言葉の術</p>	<p>△卷二 1 18 文章の道 △卷三 26 34 言葉の術 △卷五 34 37 春を待ちつゝ</p>	<p>△卷一 10 33 菖蒲の節 △卷二 14 32 いろはが るた △卷五 6 25 晩春の別 離 △卷六 27 28 千曲川旅 情の歌</p>	<p>△卷三 5 33 文章の道 7 33 菖蒲 △卷四 2 26 椰子の実 △卷五 2 31 古城のほ と △卷六 8 38 常磐木 △卷十 6 25 断想十篇</p>
<p>「十七、八歳の頃……」 「詩を新しくすることは……」 「詩を新しくすることは……」 （市井にありて） （飯倉だより） （市井にありて）</p>	<p>「十七、八歳の頃……」 「詩を新しくすることは……」 「詩を新しくすることは……」 （市井にありて） 「フランスの旅にある頃……」 （春を待ちつゝ）</p>	<p>「国民の記念日でもなく……」 （藤村読本） 「犬も道を知る……」 （市井にありて） 「時は暮れ行く春よりぞ……」 （藤村詩集） 「小諸なる……」 （シ）</p>	<p>「十七、八歳の……信州の小諸に……同じ頃……」 （飯倉だより） 「国民の……」 （藤村読本） 「名も知らぬ……」 （藤村詩集） 「小諸なる……」 （シ） 「あら雄々しきかな……」 （シ） 6 10 「俳人に……」 7 10 「句を作るに……」 8 10 「古い伝説……」 （春を待ちつゝ） 9 10 「すべてのものは……」 10 10 「涙は……」 （飯倉だより） （浅草だより）</p>
<p>作者注 3 注 48</p>	<p>作者注 3 注 49</p>	<p>作者注 3 注 16 絵 12</p>	
<p>S. 6. 10. 5 S. 10. 8. 26 訂正三版</p>	<p>S. 6. 10. 5 S. 7. 8. 5 訂正再版</p>	<p>S. 6. 8. 3 S. 6. 11. 26 訂正再版 S. 9. 7. 31 訂正三版</p>	

	<p>新制 中等国文 全十卷</p>	<p>新国文読本 全十卷</p>	<p>新制国語読本 全十卷 (巻七・八欠本)</p>
	<p>新村 出 鈴木敏也編 沢瀉久孝</p>	<p>吉田弥平編</p>	<p>東条操編</p>
	<p>金港堂</p>	<p>光風館</p>	<p>三省堂</p>
<p>△巻五 38「春を待ち つゝ」 (春を待ちつゝ)</p>	<p>△巻二 10「25海路 23 25文章雑誌 △巻四 3「23脛噺り 4「23響りんり △巻六 14「23現代詩大 観 (その六) 1「3「椰子の実」「名も知ら ぬ」</p>	<p>△巻一 6「25菖蒲の節 供 △巻二 4「26櫻の実 △巻六 12「24朝の歌 △巻一 10「31菖蒲の節 句 △巻二 7「27落葉 △巻三 1「28うてや鼓 21「28初学者の ために △巻四 20「25折にふれ て △巻五 4「28晩春の別 離</p>	<p>△巻一 9「28菖蒲の節 句 △巻三 1「28うてや鼓 21「28初学者の ために △巻四 20「25折にふれ て △巻五 4「28晩春の別 離</p>
<p>「フランスの旅にある頃……」</p>	<p>「『いよいよ明日は赤道に……』(海へ) 「十七、八歳の頃……」(飯倉だより) 「次郎は私の前に……」(嵐) 「響りんく……」(藤村詩集) 「(その六) 1「3「椰子の実」「名も知ら ぬ」</p>	<p>「国民の記念日でもなく……」(藤村読本) 「うちの裏にある……」(ふるさと) 「朝は再び此処にあり……」(藤村詩集)</p>	<p>「国民の記念日でもなく……」(藤村読本) 「毎年十月の二十日といへば……」(千曲川のスケッチ) 「うてや鼓の春の音……」(藤村詩集) 「十七、八歳の頃……」(飯倉だより) 「すべてのものは……(誠実)」 「時は暮れ行く……」(藤村詩集)</p>
<p>作者注 1</p>	<p>作者注 3</p>	<p>作者注 6</p>	<p>作者注 5</p>
<p>8 6</p>	<p>5 6</p>	<p>4 23 13</p>	<p>4 23 13</p>
<p>S. 7. 8. 15</p>	<p>S. 7. 8. 25</p>	<p>S. 7. 8. 29 S. 8. 1. 23 S. 8. 8. 2 修正三版</p>	<p>S. 7. 8. 29 S. 8. 1. 23 S. 8. 8. 2 修正三版</p>

<p>新編 中等国語読本 第二版 全十巻</p>	<p>新編 中等国語読本 全十巻</p>	<p>新制国語読本 新教授要 目準拠 全十巻</p>
<p>・</p>	<p>金子元臣編</p>	<p>・</p>
<p>・</p>	<p>明治書院</p>	<p>・</p>
<p>△巻一 8～30 菖蒲の節 供 △巻三 18～28 椰子の実 △巻四 22～30 初学者の ために 25～30 早春のス ケッチ 26～30 古城のは とり</p>	<p>△巻一 12～33 菖蒲の節 句 23～33 消息三篇 △巻三 13～29 椰子の実 △巻四 19～29 早春のス ケッチ 20～29 古城のは とり</p>	<p>△巻一 12～26 自然 △巻四 20～25 折にふれ て △巻五 4～27 晩春の別 離 21～28 初学者の ために △巻八 12～26 自然</p>
<p>「小諸なる……」 〔藤村詩集〕</p> <p>「名も知らぬ……」 〔藤村詩集〕</p> <p>「小諸に……浅草の……甲の文体……すぐれた 人の……」 〔飯倉だより〕</p> <p>「山上の春……春雨あがりの……二、小諸 の思出……浅間の麓」 〔千曲川のスケッチ〕 〔市井にありて〕</p>	<p>「国民の記念日でもなく……」 〔藤村読本〕</p> <p>「名も知らぬ……」 〔藤村詩集〕</p> <p>「小諸に……浅草の……甲の文体……すぐれた 人の……」 〔飯倉だより〕</p> <p>「山上の春……春雨あがりの……二、小 諸の思ひ出……浅間の麓では……」 〔千曲川のスケッチ〕 〔市井にありて〕</p> <p>「小諸なる……」 〔藤村詩集〕</p>	<p>「十七、八歳の頃……」 〔飯倉だより〕</p> <p>「すべてのは……」 〔飯倉だより〕</p> <p>「時は暮れゆく……」 〔藤村詩集〕</p> <p>「『花にも落日がある』……」 〔春を待ちつゝ〕</p>
<p>作者注 3 注 10 注の絵 4 筆 5 絵 1 ごい 34 文法 2</p>	<p>作者注 3 注 9 注の絵 3 絵 3 ごい 8 文法 2</p>	<p>作者注 3 注 16 注 22 絵 2</p>
<p>S・11・9・26</p>	<p>S・7・9・3</p>	<p>S・10・12・8 修正四版 S・12・7・31 修正五版</p>

	中学新国文 全十卷	新編 中等国語読本 新制版 全十卷
	笹川種郎編 帝国書院	
△卷一 10 / 27 舟路	△卷一 8 / 28 葛蒲の節 △卷三 18 / 28 椰子の実 △卷四 22 / 30 初學者のために 25 / 30 早春のス ケッチ 26 / 30 古城のほとり △卷五 25 / 30 かりがね △卷六 19 / 30 三人の訪問者 △卷七 12 / 28 複雜と單純 △卷八 24 / 30 透谷を憶ふ △卷十二 2 / 26 十九世紀研究	△卷一 8 / 28 葛蒲の節 △卷三 18 / 28 椰子の実 △卷四 22 / 30 初學者のために 25 / 30 早春のス ケッチ 26 / 30 古城のほとり
「海にして響く……」 (藤村詩集)	「国民の記念日でもなく……」 「名も知らぬ……」 「小諸に居た頃……浅草の……甲の文体には……すぐれた人の書いた」(飯倉だより) 「山上の春」「春雨あがりの……」二、小諸の思出——浅間の麓(千曲川のスケッチ)市井にありて 「小諸なる……」 「わきて流るゝ……」 「黒潮に乗って……」 「大震災のあった日から……」 「棕櫚 たう／＼ 春の雪が……」(飯倉だより) 「さもあらばあれ……」(藤村詩集) 「『冬』が訪ねてきた……」(飯倉だより) 「生活の内容が複雜で……」(シ) 「私が透谷と交はった……」(シ) 「フランスの旅にあるところ……」(春を待ちつゝ)	「国民の記念日でもなく……」 「名も知らぬ……」 「小諸に居た頃……浅草の……甲の文体には……すぐれた人の書いた」(飯倉だより) 「山上の春」「春雨あがりの……」二、小諸の思出——浅間の麓(千曲川のスケッチ)市井にありて 「小諸なる……」 「わきて流るゝ……」 「黒潮に乗って……」 「大震災のあった日から……」 「棕櫚 たう／＼ 春の雪が……」(飯倉だより) 「さもあらばあれ……」(藤村詩集) 「『冬』が訪ねてきた……」(飯倉だより) 「生活の内容が複雜で……」(シ) 「私が透谷と交はった……」(シ) 「フランスの旅にあるところ……」(春を待ちつゝ)
	注 9 絵 26 文法 2 作者注 3	作者注 3 注 10 注の絵 2 文法 2 絵 6 32
	S. 7. 11. 19	S. 12. 5. 12 S. 12. 12. 30 訂正

<p>帝国新国文 全十卷</p>	<p>最新中等国文 全十卷</p>	<p>帝国新国文 全十卷</p>
<p>芳賀矢一編 上田万年 長谷川福平 補訂</p>	<p>松村武雄編</p>	<p>藤村作編</p>
<p>富山房</p>	<p>宝文館</p>	<p>帝国書院</p>
<p>△卷二 26 / 28 春は来ぬ △卷三 3 / 28 春の一日 △卷七 5 / 25 晩春の別離</p>	<p>△卷一 1 / 32 日本 2 / 32 太陽の出る前 △卷三 5 / 31 菖蒲 15 / 31 書籍 △卷四 7 / 30 椰子の唄 23 / 30 三人の訪問者 △卷七 3 / 26 晩春の別離 △卷八 22 / 26 常磐木</p>	<p>△卷四 5 / 23 エトランゼ △卷五 7 / 26 菖蒲ふく頃 △卷六 16 / 25 故国に帰りて 17 / 25 野に出てよ △卷七 6 / 24 晩春の別離 8 / 24 朝飯</p>
<p>「時は暮れゆく…」 「今年のは雨多く…」 「春は来ぬ…」 (藤村詩集)</p>	<p>「鳥の世界は…」 (をさなものがたり) 「国民の記念日でもなく…」 (藤村説本) 「名もない草が…」 (をさなものがたり) 「名も知らぬ…」 (藤村詩集) 「『冬』が訪ねてきた…」 (飯倉だより) 「時は暮れ行く…」 (藤村詩集) 「あら雄々しきかな…」 (藤村詩集)</p>	<p>「エトランゼ」といふ言葉は… (海へ) 「国民の記念日でもなく…」 (藤村説本) 「異郷の旅ほど…」 (海へ) 「朝は再び…」 (藤村詩集) 「時は暮れ行く…」 (藤村詩集) 「復た五月が来た…」 (緑葉集)</p>
<p>作者注 3 注 8 ごい 11 絵 1</p>	<p>作者注 5 写真 1 注 12 注 2 絵 15</p>	<p>作者注 5 写真 4 注 11 絵 10</p>
<p>S. 9 S. 6 S. 6 S. T. 5. 14 訂正 2. 2 訂正 2. 8 訂正 8. 4 訂正 10 訂正 13 新制第二版</p>	<p>S. 8. 6. 30</p>	<p>S. 8. 1. 17</p>

帝國読本 改訂新版 全十卷	岩波編輯 部編	岩波書店	△卷二24、25春は来ぬ △卷三5、25春の一日 △卷七6、24晩春の別離	「春は来ぬ……」 「今年の春は……」 「時は暮れゆく……」 (シ) (シ)	作者注3 絵 3 9 9	S. 12. 7. 3
国語 全十卷	岩波編輯 部編	岩波書店	△卷二5、22落葉 △卷三2、21湖の音 △卷四1、24初旅 △卷五22、23隅田川の水 △卷七1、22結晶の力 △卷八2、20巴里通信	「毎年十月の二十日……」 (千曲川のスケッチ) 「わきてながるる……」 (藤村詩集) 「少年の私が……」 (微風) 「流れよ……」 (海へ) 「十七、八歳の頃……」 (飯倉だより) 「都市としての面積……」 (フランスだより)	作者注6 絵 5 39	S. 9. 8. 5
国語 改訂版 全十卷 (巻七―十欠本)	〃	〃	△卷二6、22落葉 △卷四1、24初旅 23、24湖の音 △卷五21、23隅田川の水	「毎年十月の二十日といへば……」 (千曲川のスケッチ) 「少年の私が……」 (微風) 「わきてながるる……」 (藤村詩集) 「流れよ……」 (海へ)	作者注3 絵 2 21	S. 12. 7. 4 S. 12. 12. 18 訂正再版
新国語読本 改訂版 全十卷	市川寛編 額原退蔵 市川寛編	星野書店	△卷一13、26愚かな馬 △卷四20、23春は来ぬ △卷七3、26晩春の別離	「良寛上人といふ方は……」 (をさなものがたり) 「春は来ぬ……」 (藤村詩集) 「時は暮れ行く……」 (シ)	作者注3 絵 3 11 1	S. 9. 8. 25
新国語読本 改訂版 全十卷	〃	〃	△卷一13、26愚かな馬 △卷四20、24春は来ぬ △卷七3、26晩春の別離	「良寛上人といふ方は……」 (をさなものがたり) 「春は来ぬ……」 (藤村詩集) 「時は暮れ行く……」 (シ)	作者注3 絵 3 11 1	S. 12. 7. 15

<p>大日本読本 新制 第二版 全十卷</p>	<p>大日本読本 改制 第一版 全十卷</p>	<p>新修国文 全十卷</p>	<p>新制国語読本 全十卷</p>	<p>新中等国文 全十卷</p>
<p>高木武編</p>	<p>、</p>	<p>富山房 編輯所編</p>	<p>東京開成館 編輯所編</p>	<p>藤村作 鳥津久基編</p>
<p>富山房</p>	<p>、</p>	<p>富山房</p>	<p>東京開成館</p>	<p>至文堂</p>
<p>△巻五 19、23 木曾より 帰りにて △巻七 5、21 晩春の別 離</p>	<p>△巻一 20、25 人工の翼 △巻二 10、25 落葉 △巻三 17、24 椰子の実 △巻五 19、23 木曾より 帰りにて △巻七 5、21 晩春の別 離</p>	<p>△巻三 27、28 文章の道 △巻五 6、25 晩春の別 離</p>	<p>△巻一 17、30 人工の翼 △巻三 17、30 舟路</p>	<p>△巻一 6、31 菖蒲の節 句 △巻二 16、28 いろはが るた △巻五 6、25 晩春の別 離 △巻六 27、28 千曲川旅 情の歌</p>
<p>「御地にても…木曾を出で立ちて…」 (書簡 M. 31. 9. 24) 「時は暮れゆく…」 (藤村詩集)</p>	<p>「けふも町の空に…」 (桃の雫) 「毎年十月の…十一月に入つて…木枯 …」 (千曲川のスケッチ) 「名も知らぬ…」 (藤村詩集) 「御地にても…」 (書簡 M. 31. 9. 24) 「時は暮れゆく…」 (藤村詩集)</p>	<p>「信州の小諸…同じ頃…浅草の…」 (飯倉だより) 「時は暮れゆく…」 (藤村詩集)</p>	<p>「けふも飯倉町の…」 (桃の雫) 「海にして響く…」 (藤村詩集)</p>	<p>「国民の記念日でもなく…」 (藤村読本) 「犬も…」 (市井にありて) 「時は暮れゆく…」 (藤村詩集) 「小諸なる…」 (口) (シ)</p>
<p>作者注 2 注 8</p>	<p>作者注 2 注 3 3 3 2</p>	<p>作者注 2 注 3 3 3 2</p>	<p>作者注 3 注 1 1 1 2 5 2</p>	<p>注 3 注 1 1 1 7 13</p>
<p>S. 6. 10. 8 訂正再版 S. 10. 6. 19 新制第二版</p>	<p>S. 12. 7. 5</p>	<p>S. 11. 7. 11</p>	<p>S. 12. 6. 20</p>	<p>S. 12. 6. 21</p>

<p>新制 新日本読本 全十巻</p>	<p>中等 大日本読本 新制版 全十巻</p>	<p>醇正国語 全十巻</p>	<p>吉沢義則編</p>	<p>能勢朝次編</p>	<p>藤村作編</p>	<p>文学社</p>	<p>大日本図書</p>	<p>△巻一 6～24 いのち △巻二 13～24 落葉 △巻三 14～23 椰子の実 △巻四 1～22 結晶の力 △巻五 7～22 第三の眼 △巻六 18～22 古城のほとり △巻十 12～19 春を待ちつゝ</p> <p>「雀のおやど」「屋根の草と釣葱」 （をさなものがたり） 「毎年十月の…十一月に…」 （千曲川のスケッチ） （藤村詩集） 「名も知らぬ…」 「十七八歳の…信州の…」 （飯倉だより） 「浅草だより・桃の半」 （浅草だより・桃の半） 「小諸なる…」 （藤村詩集） 「フランスの旅にある頃」 （春を待ちつゝ）</p>	<p>△巻一 6～26 菖蒲の節句 △巻二 8～23 消息三篇 1、3 秋涼 △巻六 22～30 千曲川旅情の歌 △巻七 8～22 晩春の別離</p> <p>「国民の記念日でもなく…」 （藤村読本） 「一昨日帰宅…」 （書簡 M. 31. 9. 24） 「小諸なる…」 （藤村詩集） 「時は暮れゆく…」 （シ）</p>	<p>作者注 7 作者絵 1 注 54 絵 2</p>	<p>作者注 2 注 4 注絵 5 絵 4 ごい 30</p>	<p>S. 12. 7. 31</p>	<p>S. 12. 7. 25</p>	<p>作者注 4 絵 1 注 14 絵 1</p>	<p>作者注 4 注 14 絵 1</p>	<p>S. 12. 6. 30</p>	<p>S. 12. 6. 30</p>
-----------------------------	-------------------------------------	---------------------	--------------	--------------	-------------	------------	--------------	---	---	---	---	---------------------	---------------------	---------------------------------------	-------------------------------	---------------------	---------------------

<p>中学説本 全十卷</p>	<p>新中学国文 全十卷</p>	<p>新制国語 全十卷</p>	<p>中学国文 全十卷</p>
<p>池田亀鑑 岩田九郎編</p>	<p>鈴木敏也編</p>	<p>広島高師 附国語漢文 研究会編</p>	<p>東京高師 国語漢文 研究会編</p>
<p>帝國書院</p>	<p>目黒書店</p>	<p>修文館</p>	<p>目黒書店</p>
<p>△卷六 7 朝 △卷六 7 朝</p>	<p>△卷一 5 26 菖蒲の節 句 △卷四 12 25 文章の道 △卷七 5 25 複雑と単 純 22 25 椰子の実</p>	<p>△卷一 7 24 菖蒲の節 句 △卷二 6 25 取穂 △卷三 2 25 文章の道 △卷七 3 20 晩春の別 離 △卷十 14 15 夜明け前</p>	<p>△卷一 5 24 パリの五 月 6 24 菖蒲の節 句 △卷四 6 22 取穂 △卷八 17 21 常磐木</p>
<p>「朝は再び…」 (藤村詩集)</p>	<p>「国民の記念日でもなく…」 (藤村説本) 「十七八歳の… 信州の… 同じ… 浅草 (飯倉だより) 「生活の内容が複雑…」 (夕) 「名も知らぬ…」 (藤村詩集)</p>	<p>「ある日また私は…」 (千曲川のスケッチ) 「十七八歳の… 信州の… 同じ… 浅草の (飯倉だより) 「時は暮れゆく…」 (藤村詩集) 「漸く… さうだ 漸く半蔵は… (静の岩 夜明け前 屋)」</p>	<p>「山羊の乳を…」 (フランスだより) 「国民の記念日でもなく…」 (藤村説本) 「ある日私は…」 (千曲川のスケッチ) 「あら雄々しきかな…」 (藤村詩集)</p>
<p>作者注 4</p>	<p>注 10 絵 3</p>	<p>注 36 絵 3</p>	<p>作者注 3 注 5 附 1 絵 3</p>
<p>S. 15. 7. 20</p>	<p>S. 14. 10. 5</p>	<p>S. 13. 8. 10</p>	<p>S. 12. 8. 10</p>

<p>国 文 全十卷</p>	<p>久松潜一編</p>	<p>弘道館</p>	<p>△卷五 6~22 晚春の別離 △卷六 18~21 千曲川 △卷七 18~20 夜明け前</p>	<p>「時は暮れゆく…」 「時は暮れゆく…」 （藤村詩集） 一古城、「小諸なる…」二、「きのふまた…」 （夕） 「『金銀欲しからずといふは例の漢やうの…』」 （夜明け前）</p>	<p>注 18</p> <p>作者注 3</p>	<p>S. 15. 8. 31</p>
			<p>△卷七 12~24 晚春の別離</p>	<p>「時は暮れゆく…」 （夕）</p>		

B・女学校読本採録状況

教科書名	編著者名	出版社	巻・課・課名	採録箇所 (出典名)	注	備考 発行年月日
高等女子日本読本	保科孝一 長尾松三郎 編	鐘美堂	巻二 2 27問答の歌 巻六 13 28 壮年の歌 巻七 9 29 二つの泉 巻九 19 28 高山に登り て遠く望む	「梅は酸くして…」 (藤村詩集) 「わかもの語りていへる…」 (シ) 「自然の母の乳房より…」 (シ) 「高根に登りまなじりを…」 (シ)	ごい注 4 ごい注 3	M・40・2・28 訂正再版
高等女子日本読本	保科孝一 長尾松三郎 共編	鐘美堂	巻二 1 27 問答の歌 巻六 13 28 壮年の歌 巻七 9 29 二つの泉 巻九 19 28 高山に登り て遠く望む	「梅は酸くして…」 (藤村詩集) 「わかもの語りていへる…」 (シ) 「自然の母の乳房より…」 (シ) 「高根に登りまなじりを…」 (シ)	ごい注 3 ごい注 3	M・40・2・28 訂正再版
明治女学読本	教育學術研 究会編	同文館	巻三 26 29 唐辛子の歌 巻五 3 28 春の歌 巻八 6 28 曉の誕生	「梅は酸くして…」 (藤村詩集) 「春は来ぬ。春は来ぬ。」 (シ) 「東の空のはのぼると…」 (シ)	ごい注 1 ごい注 10 ごい注 14	M 40・10・30
訂改 明治女学読本			巻三 26 29 唐辛子の歌 巻五 3 28 春の歌 巻八 6 28 曉の誕生	「梅は酸くして…」 (藤村詩集) 「春は来ぬ。春は来ぬ。」 (シ) 「東の空のはのぼると…」 (シ)	ごい注 1 ごい注 10 ごい注 14	M・41・1・25 修正再版
			巻二 17 30 唐辛子の歌 巻八 8 28 曉の誕生	「梅は酸くして…」 (藤村詩集) 「東の空のはのぼると…」 (シ)	ごい注 4 ごい注 12	M・42・11・25 修正四版
			巻二 17 30 唐辛子の歌 巻八 8 28 曉の誕生	「梅は酸くして…」 (藤村詩集) 「東の空のはのぼると…」 (シ)	ごい注 4 ごい注 12	M・42・11・25 修正四版

	訂改 学校高等女 用読本 国語			訂修 学校高等女 用読本 国語			訂再 学校高等女 用読本 国語
							元々堂書房 編輯所
							元々堂
	卷三 14 / 30 鳥なき里 卷七 2 / 30 春の曲 28 / 30 暁の誕生	卷三 14 / 30 鳥なき里 卷七 2 / 30 春の曲 28 / 30 暁の誕生 卷九 5 / 25 晩春の別離	卷三 14 / 30 鳥なき里 卷七 2 / 30 春の曲 28 / 30 暁の誕生 卷九 5 / 25 晩春の別離	卷三 14 / 30 鳥なき里 卷七 2 / 30 春の曲 28 / 30 暁の誕生 卷九 5 / 25 晩春の別離	卷三 12 / 28 鳥なき里 卷九 5 / 25 晩春の別離	卷三 12 / 28 鳥なき里 卷九 5 / 25 晩春の別離	卷三 12 / 28 鳥なき里 卷九 5 / 25 晩春の別離
	「鳥なき里の……」 「うてや鼓の……」 「東の空のほのぼのと」	「鳥なき里の……」 「うてや鼓の……」 「東の空のほのぼのと」 「時は暮れゆく春よりぞ」	「鳥なき里の蝙蝠や」 「うてや鼓の……」 「東の空のほのぼのと」 「時は暮れゆく春よりぞ」	「鳥なき里の蝙蝠や」 「うてや鼓の……」 「東の空のほのぼのと」 「時は暮れゆく春よりぞ」	「鳥なき里の蝙蝠や」 「時は暮れゆく春よりぞ」	「鳥なき里の蝙蝠や」 「時は暮れゆく春よりぞ」	「鳥なき里の蝙蝠や」 「時は暮れゆく春よりぞ」
	(藤村詩集)	(藤村詩集)	(藤村詩集)	(藤村詩集)	(藤村詩集)	(藤村詩集)	(藤村詩集)
	注 1 ごい注 2	注 2 注 1 注 3	注 2 注 1 ごい注 3	注 1 注 3	注 2	注 2	注 2
	T. 1. 11. 19 訂正	T. 1. 10. 7	M. 44. 9. 15 三訂	M. 44. 9. 19 三訂	M. 41. 12. 27 再版	M. 41. 9. 24 再訂	M. 41. 9. 14

〃	〃	女子 国文教科書	佐々政一編	光風館	卷二13／28植物問答 卷四22／28舟路 卷九2／26春の曲	「梅は酸くして……」 「海にしてひびく櫂の声……」 「うてや鼓の……」	(藤村詩集) (〃) (〃)	ごい注5	M・44・12・25
〃	〃	女子新説本	尾下田次郎編	明治図書	卷八10／26椰子の夾	「名も知らぬ」	(藤村詩集)	ごい注5	M・41・12・5
〃	〃	実科高等 女学校用 国語読本 上級用	〃	〃	後編 11／28暁の誕生	「東の空のはのぼのと……」	(藤村詩集)		T・4・9・15 訂正五版
〃	〃	実科高等 女学校用 国語読本	〃	〃	卷三26／32鳥なき里	「鳥なき里の……」	(藤村詩集)	ごい注3	T・4・9・15 訂正五版
〃	〃	〃	〃	〃	卷八11／28暁の誕生	「東の空のはのぼのと……」	(藤村詩集)	ごい注3	T・1・12・19 訂正四版
〃	〃	〃	〃	〃	卷三26／32鳥なき里	「鳥なき里の……」	(藤村詩集)	ごい注3	T・1・10・19 訂正三版
〃	〃	〃	〃	〃	卷二13／28植物問答 卷四22／28舟路	「梅は酸くして……」 「海にしてひびく櫂の声……」 「うてや鼓の……」	(藤村詩集) (〃) (〃)		T・1・10・11 修正三版

訂校	高等女子学読本	佐藤 正球 塩井 共編	明治書院	卷二 32(34)春を待ちつ 卷七 6(26)晚春の別離 「時は暮れゆく春よりぞ」 (藤村詩集)	「暖い雨がふって来るやうに」 (戦争と巴里)	「梅は酸くして」	卷四 30(34)酸からずせ からず	(シ)	(巻七欠)	T・10・10・28校訂
新定	女子学読本	芳賀矢一編	富山房	卷五 19(28)椰子の実 卷六 24(28)高山の眺望 卷七 10(26)二つの泉 「名も知らぬ」 「高根に登りまなじりを」 「自然の母の乳房より」 (藤村詩集)	「名も知らぬ」	「名も知らぬ」	「名も知らぬ」	「名も知らぬ」	「名も知らぬ」	T・1・10・30 訂正再版
訂改	新定女子学読本	芳賀矢一	富山房	卷五 19(28)椰子の実 卷七 11(28)二つの泉 「名も知らぬ」 「自然の母の乳房より」 (藤村詩集)	「名も知らぬ」	「自然の母の乳房より」	「名も知らぬ」	「自然の母の乳房より」	「名も知らぬ」	T・3・10・23 訂正三版
				卷七 11(28)二つの泉 「名も知らぬ」 「自然の母の乳房より」 (藤村詩集)	「名も知らぬ」	「自然の母の乳房より」	「名も知らぬ」	「自然の母の乳房より」	「名も知らぬ」	T・4・1・16 訂正四版
	訂三	吉田 歌平 篠田 利英 小島 政吉 岡田 正美 共編	金港堂	卷七 4(28)春の曲 卷九 18(24)暁の誕生 「うてや鼓の春の音」 「東の空のはのぼると」 (藤村詩集)	「うてや鼓の春の音」	「東の空のはのぼると」	「うてや鼓の春の音」	「東の空のはのぼると」	「うてや鼓の春の音」	T・1・10・31 訂正九版
				卷七 4(28)春の曲 卷九 18(24)暁の誕生 「うてや鼓の春の音」 「東の空のはのぼると」 (藤村詩集)	「うてや鼓の春の音」	「東の空のはのぼると」	「うてや鼓の春の音」	「東の空のはのぼると」	「うてや鼓の春の音」	T・2・1・20 訂正十版
				卷九 18(24)暁の誕生 「東の空のはのぼると」 (藤村詩集)	「東の空のはのぼると」	「東の空のはのぼると」	「東の空のはのぼると」	「東の空のはのぼると」	「東の空のはのぼると」	T・3・10・30 訂正十一版

修正 大正女学説本	大正女学説本 実科三 簡年用	〃	大正女学説本	大正女学説本	修正大正女学説本	大正女学説本	訂五 女子国語説本	訂四 女子国語説本
三矢重松 島山健 峯間信吉	三矢重松 島山健 峯間信吉 共編	〃	三矢重松 島山健 峯間信吉 共編	三矢重松 島山健 峯間信吉 共編	三矢重松 島山健 峯間信吉 共編	三矢重松 島山健 峯間信吉 共編	吉田弥平 篠田利夫 小島政吉 岡田正美 共編	吉田弥平 篠田利夫 小島政吉 岡田正美 共編
〃	〃	〃	〃	〃	〃	弘道館	金港堂	金港堂
卷三22 26舟路	卷三26 33舟路	卷五20 23舟路	卷五 舟路	卷之三26 33舟路	卷之三8 22ゆく春	卷之三9 27ゆく春	卷五5 28戦時の巴里 卷六15 30椰子の実 卷八6 25旅のこころ	卷六15 30椰子の实 卷八5 28旅のこころ
「海にしてひびく…」	「海にしてひびく…」	「海にしてひびく…」	「海にしてひびく…」	「海にしてひびく櫓の声…」	「霞のかけにもえ出でし…」	「霞のかけにもえ出でし…」	「昨日は十七八歳ばかりの青年の…」 （戦争と巴里） 「名も知らぬ…」 （藤村詩集） 「響りんりん音りんりん…」 （夕）	「名も知らぬ…」 （藤村詩集） 「響りんりん音りんりん…」 （夕）
（藤村詩集）	（藤村詩集）	（藤村詩集）	（藤村詩集）	（藤村詩集）	（藤村詩集）	（藤村詩集）		（藤村詩集）
作者注 ごい注3	作者注 ごい注2 出典注	作者注 出典注	作者注 出典注	作者注 ごい注1 注131	作者注	作者注	作者注 注3 作者注	作者注 写真1
T.5.11.25 修正第三版	T.2.9.7初版 T.2.12.18 訂正再版	T.4.2.12 訂正再版	T.3.11.28	T.2.9.7	T.5.3.9 修正第七版	T.1.11.7 （巻一、二次）	T.10.10.29 訂正十五版	T.7.7.30

						実科三 簡年用	
						共編	
正修 大正女学説本	三矢重松 島山健 峯間信吉 共編	弘道館	卷三 22 / 26 舟路	「海にしてひびく…」 (藤村詩集)	作者注 ごい注 3 出典注		T. 6. 2. 9 修正第四版
新選女子説本	下田次郎 尾上入郎 編	明治書院	卷六 20 / 29 舟路	「海にしてひびく…」 (藤村詩集)	ごい注 6		T. 2. 10. 30
			卷六 20 / 29 舟路	「海にしてひびく…」 (藤村詩集)	ごい注 6		T. 3. 1. 7 訂正再版
訂改 新撰女子説本	下田次郎 尾上入郎 編	明治書院	卷六 15 / 30 舟路	「海にしてひびく…」 (藤村詩集)	ごい注 5		T. 6. 12. 20 改訂再版
訂修 新撰女子説本	下田次郎 尾上入郎 編	明治書院	卷六 10 / 31 舟路	「海にしてひびく…」 (藤村詩集)	ごい注 3		T. 11. 10. 28 修訂
女子国文説本	関根正直著	秀英舎	卷三 6 / 32 植物問答 15 / 32 椰子の実 卷五 4 / 30 春の曲 卷六 10 / 30 農夫の歌 卷七 22 / 28 暁	「梅は酸くして…」 「名も知らぬ…」 「うてや鼓の春のおと…」 「朝はふたたび…」 「東の空のほのぼのと…」 (藤村詩集)	ごい注 1		T. 2. 10. 30
			卷三 6 / 32 植物問答 15 / 32 椰子の実 卷五 4 / 30 春の曲 卷六 10 / 30 農夫の歌 卷七 22 / 28 暁	「梅は酸くして…」 「名も知らぬ…」 「うてや鼓の…」 「朝はふたたび…」 「東の空のほのぼのと…」 (藤村詩集)	ごい注 1		T. 3. 1. 5 訂正再版 卷一、二、四欠

日本女子学説本	帝國婦人協会編	明治書院	卷六 19 / 31 曙の誕生	「東の空のほのぼのと」 (多)	ごい注 4	T・8・10・30
新女子国語説本 本女子国語説	吉田弥平 篠田利英 小島政吉 岡田正吉 共編	金港堂	卷三 6 / 29 巴里の春	「長いこと躊躇していた様な春が……」 (平和の巴里) 注 2	作者注 1	T・8・11・25 M・43・12・26 訂正五版
女子現代文説本	奈良女高 師附高 等女学校 国語研究会編	金港堂	卷二 15 / 27 仏蘭西土産 1 / 3 日本の言葉 2 / 3 パンと葡萄酒 3 / 3 焼肉さんお休み 卷三 13 / 19 巴里通信 卷四 3 / 24 晩春の別離 卷五 10 / 18 労働雑詠	「父さん仏蘭西ではどんなことばを話します。」 (幼きものに) 「父さん仏蘭西では何を食べます。」 (多) 「さあ、仏蘭西の小父さんで……」 (多) 「鳥国の中に引込んで……」 (戦争と巴里) 「時は暮れゆく……」 (藤村詩集) 「朝はふたたびここにあり……」 (多)	作者注 作者注 作者注 注 1	T・9・12・25 T・10・6・5 訂正再版
女子新説本	久松潜一編	至文堂	卷三 8 / 34 五月の巴里 23 / 34 利根川のはと 23 / 34 農夫の生活 30 / 34 懐古 卷四 31 / 32 太陽の言葉 卷五 2 / 25 古城のほとり 卷六 19 / 26 冬より春へ 1 / 4 春の先駆	「山羊の乳を売りに来る男が……」 (平和の巴里) 「今年の春は雨多く……」 (藤村詩集) 「私には何程自分が農夫の生活に興味を……」 (千曲川のスケッチ) 「天の河原に八百方……」 (藤村詩集) 「『お早う』とわたしは太陽の……」 (春を待ちつゝ) 「小諸なる古城のほとり……」 (藤村詩集) 「一雨ごとに温暖さを増して行く……」 (千曲川のスケッチ)	作者注・注 4 写真 1 注 3 写真 1 注 5 作者注 注 1	T・10・10・13

訂正 大正女子読本	女子新読本	
幸田成行編	久松潜一編	
啓成社	至文堂	
卷五20 38熱帯の海	卷六19 冬より春へ 卷五2 25 椰子の実 卷三8 34 五月の巴里 卷五2 19 34 懐古 28 34 農夫の生活	2 4 星 3 4 第一の花 4 4 山上の春 24 26 晩春の別離 卷八6 19 暁の誕生
「明けても暮れても私が…」 (海へ)	「一雨ごとに温暖さを増して行く…」 (千曲川のスケッチ) 「月の上るは十二時頃であらうといふ暮方…」 「『暑い寒いも彼岸まで』とは…」 「貯へた野菜は尽き…」 「時は暮れゆく…」 「東の空のほの」と… (藤村詩集)	「月の上るは十二時頃であらうといふ暮方…」 「暑い寒いも彼岸まで」とは土地の人の…」 「貯へた野菜は尽き…」 「時は暮れゆく…」 「東の空のほの」と… (藤村詩集)
	作者注 写真 1 1	作者注 写真 1 1
T・11・4 訂正1010 2026 十二版	T・15・7・15	

<p>新制 女子国語読本 修正版</p>	<p>大正女子国文読本 第二修正版</p>	
<p>開成館編輯 輯所編</p>	<p>保科孝一編</p>	
<p>東京開成館</p>	<p>育英書院</p>	
<p>卷一 16 / 36 祇園祭 卷二 27 / 34 春は来ぬ 卷四 17 / 31 かりがね</p>	<p>卷三 7 / 25 五月 2 / 2 巴里の 卷四 17 / 25 帯帯の海 23 / 25 詩二篇 1 / 2 春は来ぬ 卷七 14 / 26 跋入</p>	
<p>「春蚕が溶めば、やがて土地では……」 （千曲川のスケット） 「春は来ぬ、春は来ぬ、初音やさしき鶯よ……」 （藤村詩集） 「さもあらばあれ鶯の……」 （シ）</p>	<p>「山羊の乳を売りに来る男が……」 （平和の巴里） 「日の光は、亜刺比亜の海に……」 （海へ） 「春は来ぬ。春は来ぬ……」 （藤村詩集） 「朝、浅草を立出でて……」 （シ） 「叔父さんたちの住む……」 （をさなものがたり） 「水夫等よ錨を用意せよ……」 （海へ） 「雷のかけに崩えいでし……」 （藤村詩集） 「翌朝早く、我々の船は港を離れた。……」 （海へ） 「海にしてひびく鱸の声……」 （藤村詩集） 「棕櫚とろくろ 春の雪が来た。」 （飯倉だより） 「響りんく〜音りんく〜……」 （藤村詩集） 「東の空のはのぼると……」 （シ）</p>	
<p>作者注 真2 作者注 注2・写</p>	<p>作者注 注 1 作者注 注 5 作者注 注5 作者注</p>	<p>作者注 注2 作者注</p>
	<p>T・7・9・28 T・13・9・10 第二修正版</p>	<p>T・12・11・20 （巻一欠）</p>

<p>女子新説本</p>	<p>新制 女子国語読本 第四修正版</p>	<p>新制 女子国語読本 第三修正版</p>	
<p>松井簡治編</p>	<p>、</p>	<p>、</p>	
<p>三省堂</p>	<p>、</p>	<p>、</p>	
<p>卷五15(26睡の誕生 卷二1(30夜明け前 卷一6(30川辺</p>	<p>卷九4(26おえふ 卷一13(34人工の翼 卷九4(26おえふ</p>	<p>卷一1(31桃 卷三50(31文章雑話 卷七4(25晩春の別離 卷八18(24隅田川の水 卷九1(26婦人の眼ざめ 卷九5(23おえふ</p>	<p>自修文3(6文章雑話 卷六自修文6(6エトランゼエ 卷九23(26睡の誕生 自修文4(6江戸川の岸</p>
<p>「東の空のはのぼのと…」(藤村詩集) 「鳥の世界は暗くて…」(をさなものがたり) 「今年のは春は雨多く、ともすれば…」(藤村詩集)</p>	<p>「けふも町の空に発動機のこと…」(桃の雫) 「処女ぞ経ぬるおほかたのこと…」(藤村詩集)</p>	<p>「昔から人には慎みといふ事が…」(飯倉だより) 「処女ぞ経ぬるおほかたのこと…」(藤村詩集)</p>	<p>「一、十七・八歳の頃…二、信州の…三、同じ頃…四、浅草のこと…」(飯倉だより) 「エトランゼエ即ち外国人といふ…」(海へ) 「東の空のはのぼのと汝が世は白み…」(藤村詩集) 「処女ぞ経ぬるおほかたの、我は夢路を…」(夢)</p>
<p>作者注</p>	<p>作者注 注3 作者注 注4 注3</p>	<p>作者注 注3 作者注 注4 作者注 注10 作者注 注13 作者注 注13 作者注 注4 作者注 注3</p>	<p>作者注 注17 作者注 注2</p>
<p></p>	<p>S. 11. 7. 19 T. 11. 10. 30 修正入版</p>	<p>S. 7. 10. 10 T. 11. 10. 30 訂正七版</p>	<p>T. 11. 10. 30 T. 13. 9. 15 修正三版</p>

	国文…… 校用 女学	富山房 編輯部編	富山房	女子国文読本	吉田弥平編	金港堂	
卷一 9 / 34 巴里の五月 卷四 15 / 32 椰子の実	卷二 前編補輯 6 / 6 書籍 卷二 後篇 7 / 16 樹木の言葉 卷三 前篇 22 / 25 人のオケストラ	卷二 前編補輯 6 / 6 書籍 卷二 後篇 7 / 16 樹木の言葉 卷三 前篇 22 / 25 人のオケストラ	卷一 前篇 14 / 27 鳥の世界と虫の旅 (自修文) 卷一 中篇 15 / 29 冬の来る頃 (自修文) 卷一 29 幸福 (自修文)	卷一 前篇 14 / 27 鳥の世界と虫の旅 (自修文) 卷一 中篇 15 / 29 冬の来る頃 (自修文) 卷一 29 幸福 (自修文)	吉田弥平編	金港堂	卷六 22 / 26 鷲 26 / 26 エトランゼ 卷七 1 / 26 初学者のために 卷八 22 / 26 三人の訪問客
「名も知らぬ」 (藤村詩集)	「山羊の乳を売りに来る男が」 (平和の巴里)	「さばれ空しきさへつりは」 (ク) 「エトランゼエ (外国人) といふ言葉は」 (平和の巴里) 一、「十七・八歳」二、「信州の」三、「同じ頃」四、「浅草の」 (飯倉だより) 「『冬』が訪ねて来た。 ……『貧』が」 (シ)	「幸福がいろいろな家へ」 (千曲川のスケッチ) 一、「名もない草が」 (ク) 二、「講堂に近い所に」 (ク) 「私は今までの通信の中に」 (フランスだより)	「『幸福』がいろいろな家へ」 (をさなものがたり) 「明けても暮れても」 (海へ)	吉田弥平編	金港堂	「さばれ空しきさへつりは」 (ク) 「エトランゼエ (外国人) といふ言葉は」 (平和の巴里) 一、「十七・八歳」二、「信州の」三、「同じ頃」四、「浅草の」 (飯倉だより) 「『冬』が訪ねて来た。 ……『貧』が」 (シ)
注・注 2	作者注・注 3・絵 2・作者	作者注・注 1	内容 1・ごい 3 ごい 1 注 3	作者出典注 注 1・ごい 3	作者注・注 1	作者注	作者注・注 1 作者注 作者注
			T・14・10・30		T・14・10・28		T・14・10・7

女子国語読本	岩城準太郎 編	目黒書店	卷五 3～30 春の曲 卷七 2～29 晩春の別離 卷八 4～27 エトランゼ 卷九 4～29 子に送る手紙	「うてや鼓のはるの曲…」 「時は暮行く…」 「エトランゼエといふ言葉は…」 (平和の巴里) 「お前が私達と一緒に…」 (嵐)	作者注・注 2 作者注・注 7 出典注・注 11 作者・出典注・ごい 1	T・14・10・30
女子国文新選	吉沢義則編	星野書店	一、23～29 初学者のために 二、8～28 心がけ 三、3～33 春の曲 五、18～34 腕の誕生 六、5～33 椰子の実 七、6～30 晩春の別離 九、14～27 おえふ	「十七八歳の頃…」 (飯倉だより) 「うてや鼓の春の曲…」 (藤村詩集) 「東の空のほのぼのと…」 (〇) 「名も知らぬ…」 (〇) 「時は暮れゆく春よりぞ…」 (〇) 「処女ぞ経ぬるおほかたの…」 (〇)	作者注・注 2 作者注・注 2 作者注 作者注 作者注 作者注・注 1 写真 8 作者注	T・14・12・1
現代女子国語読本	八波則吉編	東京開成館	卷一前編 9～26 文章雑話 卷九前編 6～16 腕の誕生 卷一 10～25 少年と少女 卷二 23～25 桃	「十七歳の頃、私は…」 (飯倉だより) 「東の空のほのぼのと…」 (藤村詩集) 「父さんが仏蘭西の田舎へ…」 (幼なきものに) 「三月の桃の節句は…」 (市井にありて)	作者注・注 2 作者注 作者注 作者注 作者注 作者注・注 7 写真 5 写真 2 写真 6 作者注・注 5	T・15・8・28 修正三版

<p>国文鑑</p>	<p>修正編女子国文</p>	<p>新編女子国文</p>
<p>垣内松三編</p>	<p>藤井乙男編 春日政治編</p>	<p>藤井乙男編 春日政治編</p>
<p>文学社</p>	<p>修文館</p>	<p>修文館</p>
<p>卷一 2 (43日の出る前) 2 (43附) 卷二 1 (43小さな旅人) 卷三 1 (34感想四題) 1 (34附)</p>	<p>卷一 10 (25少年と少女) 卷二 23 (25桃) 卷三 18 (25附・椰子の) 卷五 5 (26旅情) 卷八 6 (23おえふ) 卷十 16 (19婦人の眼ざめ)</p>	<p>卷三 18 (25附・椰子の) 卷五 5 (26旅情) 卷八 6 (23おえふ) 卷十 16 (19婦人の眼ざめ)</p>
<p>「鳥の世界は暗くて、いつまでも……」 (をさなものがたり) 「紅細くたなびける雲とならばや」 (藤村詩集) 「名もない草が路ばたの石わきに……」 (をさなものがたり) 「十七八歳の頃、私は……」(飯倉だより) 「一寸百姓でないものから想像すると……」 (〆)</p>	<p>「父さんが仏蘭西の田舎へ……」 (幼なきものに) 「三月の桃の節句は……」 (市井にありて) 「名も知らぬ遠き島より」 (藤村詩集) 小諸なる古城のほとり「小諸なる古城のほとり」千曲川のほとりにて「昨日またかくてありけり」 (藤村詩集) 「処女ぞ経ぬるおほかたの……」 (藤村詩集) 「婦人の心が改まりつつあること……」 (飯倉だより)</p>	<p>「名も知らぬ遠き島より」 (藤村詩集) 小諸なる古城のほとり「小諸なる……」千曲川のほとりにて「昨日またかくてありけり」 (藤村詩集) 「処女ぞ経ぬるおほかたの……」 (藤村詩集) 「婦人の心が改まりつつあること……」 (飯倉だより)</p>
<p>作者注・写 6 作者注・注</p>	<p>作者注・注 1 作者注・注 1 カット1 作者注・注 7 ごい1 写真1</p>	<p>絵1 作者注・注 1 カット1 カット1 作者注・注 9 写真1</p>
<p>S・2・1・29 訂正再版</p>	<p>T・15・12・10 訂正再版</p>	<p>T・15・8・29</p>

国文鑒 第二版	国文鑒 第三版
◇	◇
<p>卷一 3 / 43 潮の音 41 / 43 春</p> <p>卷二 1 / 39 結晶の力 1 / 39 附 38 / 39 桃</p> <p>卷三 13 / 35 海 33 / 35 言葉の術</p> <p>卷四 5 / 30 松島瑞巖寺 に遊び葡萄 栗鼠の木彫 を観て</p> <p>5 / 30 附</p> <p>卷五 27 / 30 春を待ちつ</p>	<p>卷一 3 / 44 潮の音 41 / 44 春</p> <p>卷二 1 / 39 結晶の力 1 / 39 附</p> <p>卷三 12 / 35 海 37 / 39 人工の翼 32 / 35 言葉の術</p> <p>卷四 5 / 30 葡萄栗鼠の 木彫を観て</p>
<p>「わきてながるる」 (藤村詩集) 「二月に入って暖い雨が来た。」 (千曲川のスケッチ) 「十七八歳の頃、私は……」 (飯倉だより) 「素人は土を見ると……」 (シ) 「けふも町の空に……」 (桃の雫) 「船は印度の南端を過ぎた……」 (海へ) 「詩を新しくすることは……」 (市井にありて) 「舟路も遠し瑞巖寺」 (藤村詩集)</p> <p>「明治二十九年の秋より……」 (若菜集の序) 「フランスの旅にある頃、私は……」 (春を待ちつ)</p>	<p>「わきてながるる」 (藤村詩集) 「二月に入って暖い雨が来た。」 (千曲川のスケッチ) 「十七八歳の頃、私は……」 (飯倉だより) 「素人は土を見ると……」 (シ) 「けふも町の空に……」 (桃の雫) 「船は印度の南端を過ぎた……」 (海へ) 「詩を新しくすることは……」 (市井にありて) 「舟路も遠し瑞巖寺」 (藤村詩集)</p>
<p>作者注 注 5</p> <p>作者注・注 注 5</p>	<p>作者注 注 5</p> <p>作者注・注 注 5</p>
<p>S・7・8・20 T・15・10・10 第二版</p>	<p>S・12・7・26 T・15・10・7 第三版</p>

<p>新定女子国文</p>	<p>新定女子国文</p>	<p>卷一 10 28 良寛上人と馬 卷二 18 28 落葉 卷四 25 28 桃 卷五 7 30 戦時の巴里 卷六 1 28 故国の饑 17 28 椰子の実 卷七 6 25 故山の児に 卷十一 21 嵐の後</p>	<p>「良寛上人は……」 (をさなものがたり) 「毎年十月の二十日といへば……」 (千曲川のスケッチ) 「三月の桃の節句は……」 (市井にありて) 「昨日は十七八歳ばかりの……」 (戦争と巴里) 「三年前故国の春に……」 (海へ) 「名も知らぬ……」 (藤村詩集) 「『太郎よ、一日の仕事……』」 (嵐) 「いよいよ次郎の、家を離れて……」 (ク)</p>	<p>2 作者注 2 作者注 5 作者注 5 作者注 6 作者注 2 作者注 2 作者注 4 作者注 1 作者注 9 作者注 12 作者注 3 作者注 3 作者注 1 作者注</p>	<p>S. 2. 9. 28 S. 3. 1. 24 訂正再版</p>
<p>新定女子国文</p>	<p>吉田弥平編 金港堂</p>	<p>卷一 10 28 良寛上人と馬 卷二 18 28 落葉 卷四 25 28 桃 卷五 7 30 戦時の巴里 卷六 1 28 故国の饑 17 28 椰子の実 卷七 6 25 故山の児 卷十一 21 嵐の後</p>	<p>「良寛上人は越後の国の出雲崎といふ……」 (をさなものがたり) 「毎年十月の二十日といへば……」 (千曲川のスケッチ) 「三月の桃の節供は……」 (市井にありて) 「昨日は十七八歳ばかりの青年の一群に……」 (戦争と巴里) 「三年前故国の春に……」 (海へ) 「名も知らぬ遠き島より……」 (藤村詩集) 「『太郎よ、一日の仕事をおしまひ……』」 (嵐) 「いよいよ、次郎の、家を離れて行く日も……」 (ク)</p>	<p>2 作者注 2 作者注 5 作者注 5 作者注 6 作者注 2 作者注 2 作者注 4 作者注 1 作者注 9 作者注 12 作者注 3 作者注 3 作者注 1 作者注</p>	<p>S. 2. 9. 28</p>
<p>新定女子国文</p>	<p>〃</p>	<p>〃</p>	<p>「三月の桃の節供は……」 (市井にありて)</p>	<p>3 作者注 注</p>	<p></p>

<p>新定女子国文 改訂版</p>	<p>新定女子国文 三訂版</p>	<p>新定女子国文</p>
<p>卷三12 祇園祭 卷四15 26 大乗寺を訪 卷五15 26 短夜の頃 卷九20 21 嵐の後</p>	<p>卷二24 25 桃 卷三12 28 祇園祭 卷四15 28 大乗寺を訪 卷五15 26 短夜の頃 卷九20 21 嵐の後</p>	<p>卷一11 27 書籍 卷六1 28 人工の翼 卷八1 23 野に出てよ 卷十19 25 王政復古</p>
<p>「春蚕が済む頃は……」 (千曲川のスケッチ) 「大乗寺は……」 (山陰土産) 「毎日よく降った」 (市井にありて) 「いよいよ次郎の家を離れて……」 (嵐) 「三月の桃の……」 (市井にありて)</p>	<p>「春蚕が済む頃は……」 (千曲川のスケッチ) 「大乗寺は……」 (山陰土産) 「毎日よく降った……」 (市井にありて) 「いよいよ次郎の家を……」 (嵐) 「三月の桃の……」 (市井にありて)</p>	<p>1 2 地震「地震が揺れて……」 (をさなものがたり) 2 2 書籍「名もない草が……」 (桃の半) 「朝はふたたび此処にあり……」 (藤村詩集) 「ある朝、半蔵は村の……」 (夜明け前) 1 2 地震「地震が揺れて……」 (をさなものがたり) 2 2 書籍「名もない草が……」 (桃の半)</p>
<p>作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注</p>	<p>作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注</p>	<p>作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注</p>
<p>S. 2. 9. 28 S. 7. 8. 25 訂正三版</p>	<p>S. 2. 9. 28 S. 8. 1. 19 訂正四版</p>	<p>S. 2. 9. 28 S. 12. 7. 2 訂正五版</p>
<p>作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注</p>	<p>作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注</p>	<p>作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注 作者注・注</p>

和昭 女子国文	女子国文選 〔新制版〕	女子国文選 〔第三版〕	女子国文選	
関根正直編 笹川種郎編	〃	〃	明治書院 編輯部	
帝國書院	〃	〃	明治書院	
卷七 22 25 舟路	卷二 25 29 眠れる春よ 自修文三、捨て犬	卷三 22 29 椰子の実 卷六 14 23 小諸なる古城のほとり	卷一 3 33 香の国へ光 の世界へ 卷二 22 31 誘惑 卷五 4 31 春の曲 26 31 文章の道 卷十 8 27 三人の訪問者	卷八 1 23 野に出でよ 卷十 19 25 王政復古
「海にして響く…」 (藤村詩集)	「眠れる春よ…」 (藤村詩集) 「短い鼠色の毛と…」 (緑葉集) 「山羊の乳を売りに…」 (平和の巴里) 「名も知らぬ…」 (藤村詩集) 「スエズ運河へ…」 (海へ) 「長いこと躊躇して居た…」 (平和の巴里)	「名も知らぬ…」 (藤村詩集) 「小諸なる古城のほとり…」 (のみ) 「時は暮れゆく…」 (シ)	「名も知らぬ…」 (藤村詩集) 「小諸なる古城のほとり…」 (のみ) 「時は暮れゆく…」 (シ) 「十七八歳の頃…」 (飯倉だより) 「冬が訪ねて来た…」 (シ)	「朝はふたたび…」 (藤村詩集) 「ある朝、半蔵は…」 (夜明け前)
カット 1	作者注・カット 1 作者注・注 作者注・注 作者注・注	作者注 作者注・注 作者注・注 作者注・注	注 2 注 1	作者注 作者注・注 作者注・注 作者注・注
	S. 3. 10. 31	S. 12. 5. 12	S. 11. 9. 1	S. 2. 10. 23

<p>新制 昭和女子国 文読本</p>	<p>昭和女子国文読本 保科孝一編 育英書院</p>			<p>卷二 24 / 24桃 卷三 2 / 22 太郎の家 11 / 22 短夜の頃 卷六 2 / 23 文章雑誌 9 / 23 鳥取の宿 22 / 23 千曲川旅 情の歌</p>	<p>卷八 27 / 32 小諸なる古城のほとり 卷一 1 / 20 桃 9 / 20 灯を見に 卷二 21 / 20 大都会バリ 卷三 23 / 20 藪入 卷五 3 / 25 太郎の家 卷六 4 / 25 鳥取の宿 卷七 5 / 26 晩春の別離 卷八 3 / 23 瑞殿寺にて 上巻用上 16 / 24 松江まで 上級用下 22 / 25 千曲川 旅情の歌</p>	<p>「五月の…」 「四月に入って…太郎には…」 「毎日よく降った…」(市井にありて) 「十七八歳の頃…」 「『茄子にごんほは…』私達は…」 「小諸なる古城のほとり…」(のみ) (藤村詩集)</p>	<p>「葛蒲が男の児に…」 「叔父さんたちの住む…」 「都市としての面積…」 「朝浅草をたちいでて…」 その一「遠い山地の方に…」 その二「やがて四月の十三日…」 「『茄子に、ごんほはいらんかな』」 「時は暮行く…」 「舟路も速し…」 「私と鶏二とが…」 「小諸なる古城のほとり…」 (藤村詩集)</p>	<p>作者注・注 5・絵1 作者注・注 7・絵2 作者注・注 1・絵1 注4・写真 注3</p>	<p>絵1 作者注・注 5・写真1 注6・写1 作者注・注 6・写真2 作者注・注 2 作者注・注 6地区1 作者注・注 4・絵2 作者注・注 7 作者注・注 2 作者注・注 1 作者注・注 2 作者注・注 2</p>	<p>S. 8. 9. 22 T. 7. 9. 28 第四修正版</p>	<p>S. 3. 8. 10 T. 7. 9. 28 第三修正版</p>
-----------------------------	--------------------------------	--	--	--	---	---	--	--	---	--	--

<p>子女 新国語読本 第二版</p>	<p>沢瀉久孝 木枝増一 共編</p>	<p>修文館</p>	<p>卷九19、26 太郎の家 「遠い山地の方に出来かけている……」 (嵐)</p>	<p>3・出典注 作者注写真</p>	<p>S・7・11・23 訂正再版</p>
<p>女子新国語読本 第三版</p>	<p>沢瀉久孝 木枝増一 共編</p>	<p>修文館</p>	<p>卷一4、25 言葉の愛 一、言葉の愛 「『父さん』と……」 (幼きものに) 二、ふるさと 「山や林は父さんの……」 (ふるさと) 三、東京の言葉 「吉村のお婆さんや……」 (をさなものがたり) 「三月の桃の節句は……」(市井にありて)</p>	<p>17・作者・出典注 注14・ごい注3</p> <p>12・作者・出典注 注11・ごい注6</p> <p>6・作者・出典注 注2・ごい注15</p>	<p>S・7・7・30 S・12・8・15 訂正五版</p>
<p>沢瀉久孝 木枝増一 共編</p>	<p>修文館</p>	<p>卷一4、24 言葉の愛 一、言葉の愛 「『父さん』と……」 (幼きものに) 二、ふるさと 「山や林は父さんの……」 (ふるさと) 三、東京の言葉 「吉村のお婆さんや……」 (をさなものがたり) 「三月の桃の節句は……」(市井にありて)</p>	<p>「十七八歳の頃……」(飯倉だより) 「毎日よく降った。……」(市井にありて) 一、「小諸なる古域のほとり……」(藤村詩集) 「時は暮れ行く……」 「東の空のはのぼると……」</p>	<p>2・作者・出典注 注8・ごい注16</p> <p>2・作者・出典注 注6・ごい注16</p> <p>1・作者・出典注 注11・ごい注3</p> <p>1・作者・出典注 注9・ごい注6</p> <p>1・作者・出典注 注1・ごい注3</p>	<p>S・10・8・3 訂正三版</p>

<p>女子新国語読本 改訂版</p>	<p>女子新国語読本 第三版</p>	
<p>◇</p>	<p>◇</p>	
<p>◇</p>	<p>◇</p>	
<p>卷一 3/22 言葉の愛 一、言葉の愛 二、ふるさと の言葉</p>	<p>卷一 4/24 言葉の愛 一、言葉の愛 二、ふるさと の言葉 三、東京の言 葉</p>	<p>卷一 3/25 いろはがる た 卷四 3/26 文章の道 卷五 8/21 短夜の頃 卷六 20/22 千曲川旅情 の歌</p>
<p>「山や林は父さんの……」 (ふるさと)</p>	<p>「『父さん』と……」 (幼きものに)</p>	<p>「い、犬も道を知る。……」 (し)</p> <p>「十七八歳の頃私は……」 (飯倉だより)</p> <p>「毎日よく降った。……」 (市井にありて)</p> <p>「小諸なる古城のほとり……」 (藤村詩集)</p>
<p>作者・出典 注・注 2</p>	<p>作者・出典注 注 1・ごい 12</p> <p>作者・出典注 注 14・ごい 17</p> <p>作者・出典注 注 4・ごい 5・注 17</p> <p>作者・出典注 注 16・ごい 7</p> <p>作者・出典注 注 10・ごい 12</p> <p>写真・出典注 注 2・ごい 4</p>	<p>作者・出典注 注 4・ごい 5・注 12</p> <p>作者・出典注 注 16・ごい 7</p> <p>作者・出典注 注 10・ごい 12</p> <p>写真・出典注 注 2・ごい 5</p>
	<p>S 13 訂正再版 S 12 8 15</p>	

<p>女子新国語読本</p>	<p>女子新国語読本 改訂版 四年制用</p>	
<p>ク</p>	<p>ク</p>	
<p>ク</p>	<p>ク</p>	
<p>卷二 17～21 桃 卷三 18～25 いろはがら た 卷四 3～26 文章の道 卷五 8～21 短夜の頃 卷六 20～22 千曲川旅情 の歌</p>	<p>卷一 3～22 言葉の愛 一、言葉の愛 二、ふるさと との言葉 卷二 19～22 桃 卷三 15～24 いろはがら た 卷四 4～22 文章の道 卷六 18～20 千曲川旅情 の歌</p>	<p>卷二 19～22 桃 卷三 15～24 いろはがら た 卷四 4～22 文章の道 卷六 18～21 千曲川旅情 の歌</p>
<p>「三月の桃の節句は……」 （市井にありて） 「い、犬も道を知る……」 （ク） 「十七八歳の頃、私は……」 （飯倉だより） 「毎日よく降った……」 （市井にありて） 「小諸なる古城のほとり……」 （藤村詩集）</p>	<p>「三月の桃の節句は……」 （ふるさと） 「山や林は父さんの……」 （市井にありて） 「い、犬も道を知る……」 （ク） 「十七八歳の頃、私は……」 （飯倉だより） 「小諸なる古城のほとり……」 （藤村詩集）</p>	<p>「三月の桃の節句は……」 （市井にありて） 「い、犬も道を知る……」 （ク） 「十七八歳の頃私は……」 （飯倉だより） 「小諸なる古城のほとり……」 （藤村詩集）</p>
<p>作者・出典注 注4・こい6</p>	<p>作者・出典注 注15・こい5 作者・出典注 注4・こい5 作者・出典注 注7・こい16 作者・出典注 注1・こい10</p>	<p>作者・出典注 注2・注7・出典 作者・出典注 注5・注3・出典 写真注1</p>
<p>S・18・7・5 訂正四版</p>	<p>S・15・11・11</p>	<p>S・12・7・20 S・15・8・15</p>

女子新日本読本	吉沢義則編	星野書店	<p>卷一 3 - 29 日の出る前 卷三 12 - 27 文章雑話 卷四 12 - 29 嵐 卷五 10 - 27 故国の饑 卷七 5 - 23 詩二編</p>	<p>「鳥の世界は暗くていつまでも…」 <small>(をきなものがたり)</small> 「十七八歳の頃、私は…」<small>(飯倉だより)</small> 「子供等は古い時計のかかった…」<small>(嵐)</small> 「三年前故国の春に背いて…」<small>(海へ)</small> 「時は暮れゆく春よりぞ…」<small>(藤村詩集)</small> 「小諸なる古城のほとり…」<small>(夕)</small></p>	<p>作者注・ごい注 1 作者注・注 1 作者注・注 1 写真注 1 作者注・写真 3</p>	S・7・8・15
国文校女子用子	富山房編輯部	富山房	<p>卷二 24 - 26 の自修文 卷八 3 - 23 秋風の歌 卷一 4 - 25 玩具は野にも島にも 卷二 26 - 28 桃 卷三 6 - 27 巴里の五月 卷四 22 - 23 藤村詩集</p>	<p>「三月の桃の節句は…」<small>(市井にありて)</small> 「しづかにきたる秋風の…」<small>(藤村詩集)</small> 「父さんの幼少の時のように…」<small>(ふるさと)</small> 「三月の桃の節句は…」<small>(市井にありて)</small> 「山羊の乳を売りに来る男が…」<small>(平和の巴里)</small> 「千曲川旅情の歌「小諸なる古城のほとり…」<small>(藤村詩集)</small> 椰子の実「名も知らぬ遠き島より…」<small>(夕)</small></p>	<p>ごい注 7・作者注 1 写真注 3 作者注・注 1 作者注・写真 3 作者注・写真 3 カット 1 8・写真 3 3・カット 1 作者注・写真 1 5ごい注 1 作者注 1 写真 4 写真 3 写真 1</p>	S・7・8・20
帝国女子新国文	笹川種郎編	帝国書院	<p>卷五 19 - 28 舟路 卷八 24 - 24 隅田川 一学年 28 - 48 をきなきものに 1 - 3 銀杏の櫛</p>	<p>「流れよ流れよ」<small>(海へ)</small> 「海にしてひびく…」<small>(夕)</small> 「流れよ流れよ」<small>(海へ)</small> 「太郎よ…」 (幼きものに)</p>	<p>作者注・ごい注 3 作者注・注 7 作者注・写真 3 作者注・写真 3 作者注・写真 1 作者注・写真 1 作者注・写真 1</p>	S・7・11・19

	純正女子国語説本 四年制用							
	女子国文新説本							
	千田憲編							
	右文書院							
巻四28／28桃	巻三10／29 日本語の恋 しき	巻三10／26 芭蕉の事	巻三18／27 文章道	巻五15／28 帰朝	巻十3／24 芭蕉のこと	巻六27／27 木曾路御通 行	巻十3／24 芭蕉のこと	巻十3／24 芭蕉の事
「三月の桃の節供は……」 (市井にありて)	「兼好法師曰く『おほしきこと……』」 (平和の巴里)	「芭蕉は精神上の……」 (春を待ちつゝ)	「十七八歳の頃……」 (飯倉だより)	「シンガポールまで帰れば……」 (市井にありて)	「芭蕉の生涯は……」 (春を待ちつゝ)	「旧暦九月も末になつて……」 (夜明け前)	「芭蕉の生涯は……」 (春を待ちつゝ)	「芭蕉の生涯は……」 (春を待ちつゝ)
作者注・注3 こい5 作者注・注5 こい6 写真18 カット1	作者注・注3 こい4 作者注・注8 こい4 写真8 こい7 カット2 作者注・注1 こい7	作者注・注5 こい13 写真1 作者注・注5 こい29 2 こい注4 写真2 作者注・注2 こい注4 写真2	作者注・注7 こい8 写真1 作者注・注4 こい10 作者注・注4 こい注4 写真2	作者注・注2 こい5 写真2 作者注・注2 こい15 写真4	作者注・注2 こい5 写真2 作者注・注2 こい15 写真4	作者注・注2 こい5 写真2 作者注・注2 こい15 写真4	作者注・注2 こい5 写真2 作者注・注2 こい15 写真4	作者注・注1 こい1 写真1
	S・8・8・10		S・13・6・28		S・16・8・25 訂正三版	S・12・7・28		

		改訂 女子国文新 説本	改訂 女子国文新 説本 四年制用
		千田憲編	千田憲編
		右文書院	右文書院
		卷五 5 - 28 文章の道 卷七 6 - 26 晩春の別離	卷三 10 - 29 日本語の恋 卷四 28 - 28 桃 卷五 5 - 27 文章の道 卷七 5 - 27 晩春の別離
		「十七八歳の頃私は……」 （飯倉だより） （藤村詩集）	「兼好法師曰く……」 （平和の巴里） 「三月の桃の節供は……」 （市井にありて） 「十七八歳の頃、私は……」 （飯倉だより） 「時は暮れ行く……」 （藤村詩集）
		作者注・注 3 ごい 10 注 1	作者注・注 3 ごい 5 注 2 注 10 注 8
		S. 11. 7. 30 改訂版	S. 12. 6. 10 改訂版
	昭代女子国文		
	金子彦二郎 編		
	光風館		
	卷四 20 - 25 文章雑話 卷六 24 - 26 春を待ちつ 卷七 7 - 26 晩春の別離 卷九 23 - 23 婦人の眼ざめ ・おおしぶきが頬 につめたい	「十七八歳のころ私は……」 （飯倉だより） 「大寒も近づいた……」 （春を待ちつ） 「小諸なる古城のほとり……」 （藤村詩集） 「時は暮れゆく……」 （シ） 「汝紺碧の……」 （シ） 「昔から人には慎しみといふ……」 （飯倉だより）	「平和の使者ともいふべき……」 （桃の半） 「芭蕉。しばらくこの庭を……」 （市井にありて） 「響りんりん……」 （藤村詩集）
		作者注・注 3 ごい 10 注 1	作者注・注 3 ごい 5 注 2 注 10 注 8
		S. 8. 8. 26	S. 12. 6. 10 改訂版

卷九 8 22 晩春の別離 詩二章	卷六 27 28 三義鳩の記 卷二 27 27 草の言葉 卷四 13 29 響りんりん 音りんりん 卷六 27 28 春を待ちつ	卷九 8 25 晩春の別離 詩二章	卷六 28 30 春を待ちつ 音りんりん	卷九 8 26 茶三題	卷六 28 30 春を待ちつ 音りんりん	卷九 8 26 晩春の別離 詩二章	卷六 28 30 春を待ちつ 音りんりん
「平和の使者ともいふべき……」 〔芭蕉。しばらくこの庭を……〕 〔響りんりん……〕 〔大寒も近づいた……〕 〔小諸なる古城のほとり……〕 〔時はくれ行く……〕	「平和の使者ともいふべき……」 〔芭蕉。しばらくこの庭を……〕 〔響りんりん……〕 〔大寒も近づいた……〕 〔小諸なる古城のほとり……〕 〔時は暮れゆく……〕	「私は茶のあまり強いのは……」 〔春を待ちつ……〕	「大寒も近づいた……」 〔春を待ちつ……〕	「私は茶のあまり強いのは……」 〔春を待ちつ……〕	「平和の使者ともいふべき……」 〔芭蕉。しばらくこの庭を……〕 〔響りんりん……〕 〔大寒も近づいた……〕 〔小諸なる古城のほとり……〕 〔時は暮れゆく……〕	「私は茶のあまり強いのは……」 〔春を待ちつ……〕	「大寒も近づいた……」 〔春を待ちつ……〕
作者注・注 7 写真 1	作者注・注 7 写真 1	作者注・注 7 写真 1	作者注・注 7 写真 1	作者注・注 7 写真 1	作者注・注 7 写真 1	作者注・注 7 写真 1	作者注・注 7 写真 1
S・14・10・29	S・14・10・29	S・13・6・16	S・13・6・16	S・13・6・16	S・12・9・12 修正三版	S・12・9・12 修正三版	S・12・9・12 修正三版

<p>昭代女子国文 四ヶ年用</p>	<p>昭代女子国文</p>	<p></p>
<p>金子彦二郎 編</p>	<p></p>	<p></p>
<p>光風館</p>	<p></p>	<p></p>
<p>卷七 6 ~ 28 晩春の別離 詩一章</p> <p>卷六 26 ~ 28 春を待ちつ</p> <p>卷四 13 ~ 29 響りんりん 音りんりん</p> <p>卷二 27 ~ 28 草の言葉</p> <p>卷一 22 ~ 29 三義鳩の記</p>	<p>卷四 20 ~ 25 文章雑話</p> <p>卷六 24 ~ 26 春を待ちつ</p> <p>卷七 7 ~ 26 晩春の別離 詩二章 お飛沫が 頬に冷たい</p>	<p>卷一 22 ~ 28 三義鳩の記</p> <p>卷二 27 ~ 27 草の言葉</p> <p>卷四 13 ~ 29 響りんりん 音りんりん</p> <p>卷六 27 ~ 28 春を待ちつ</p> <p>詩一章</p> <p>卷九 8 ~ 22 晩春の別離</p>
<p>「平和の使者ともいふべき姿を…」 (桃の半)</p> <p>「芭蕉。しばらくこの庭を掃きに来る人の…」 (市井にありて)</p> <p>「響りんりん音りんりん…」 (藤村詩集)</p> <p>「大寒も近づいた…」 (春を待ちつ)</p> <p>「小諸なる古城のほとり…」 (藤村詩集)</p> <p>「時は暮れ行く春よりぞ…」 (シ)</p>	<p>「十七八歳のころ、私は…」 (飯倉だより)</p> <p>「大寒も近づいた。…」 (春を待ちつ)</p> <p>「小諸なる古城のほとり」 (藤村詩集)</p> <p>「時は暮れ行く…」 (シ)</p> <p>「汝紺碧の埜場よ…」 (シ)</p>	<p>「平和の使者ともいふべき…」 (桃の半)</p> <p>「芭蕉。しばらくこの庭を…」 (市井にありて)</p> <p>「響りんりん…」 (藤村詩集)</p> <p>「大寒も近づいた…」 (春を待ちつ)</p> <p>「小諸なる古城のほとり…」 (シ)</p> <p>「時は暮れ行く…」 (シ)</p>
<p>作者注・注9 写真5</p> <p>作者注・注8 (絵3)</p> <p>作者注・注4 (絵3)</p> <p>作者注・注3 ごい1・注3</p> <p>作者注・注3 ごい3・注3</p> <p>作者注・注4 ごい1・注3</p> <p>作者注・注3 ごい3・注3</p>	<p>作者注・注3 写真5</p> <p>作者注・注19</p> <p>作者注・注3 写真3</p> <p>作者注・注8 (絵2)</p> <p>作者注・注3 写真3</p> <p>作者注・注19</p>	<p>作者注・注7 写真2・注1</p> <p>作者注・注1 写真3</p> <p>作者注・注1 写真3</p> <p>作者注・注1 写真3</p> <p>作者注・注1 写真3</p> <p>作者注・注1 写真3</p> <p>作者注・注1 写真3</p> <p>作者注・注1 写真3</p> <p>作者注・注1 写真3</p>
<p>S・12・8・22 修正三版</p>	<p>S・8・8・26</p>	<p>S・14・10・29 修正再版</p>

	新女子 国文								
	下田次郎 尾上八郎 編								
	明治書院								
	卷七2-15 <small>(卷一六欠)</small> 小諸なる古城のほとり	卷七2-15 <small>(卷一六欠)</small> 小諸なる古城のほとり	卷八1-27茶三題	卷六 春を待ちつつ・ 詩二章 卷七6-28 晩春の別離	卷八1-27茶三題	卷七6-28 晩春の別離 詩二章	卷八1-27茶三題	卷二22-28 三義鳩の記	卷八1-27茶三題
	「小諸なる古城のほとり……」 (藤村詩集)	「小諸なる古城のほとり……」 (藤村詩集)	お茶の話「私は、茶のあまり強いのは……」 (春を待ちつつ……)	「大寒も近づいた……」 (春を待ちつつ……)	「小諸なる古城のほとり……」 (藤村詩集)	「時は暮れ行く春よりぞ……」 (ク)	お茶の話「私は、茶のあまり強いのは……」 (春を待ちつつ……)	「平和の使者とも……」 (桃の雪)	お茶の話「私は、茶のあまり強いのは……」 (春を待ちつつ……)
	作者注・注3	作者注・注3	作者注・注5 写真5	作者注・注8 (絵3)	作者注・注3 写真5	作者注・注15 写真5	作者注・注5 写真1	作者注・注8 (絵1) 写真2 作者注・注4 (絵3)	作者注・注7 写真1
	S・9・3・7 訂正	S・8・8・31 (発行も) (T・15・10・28)	S・16・11・5 修正三版		S・13・2・15 修正再版			S・12・8・22	

	新女子国文 〔新制版〕 四年制用		新女子国文 〔新制版〕						
卷二13 27千曲川のほとり 卷三15 29椰子の実	卷二13 27千曲川のほとり 卷三15 29椰子の実 卷六8 26小諸なる古城のほとり	卷二13 27千曲川のほとり 卷六8 26小諸なる古城のほとり 卷七4 14晩春の別離	卷二13 27千曲川のほとり 卷三15 29椰子の実 卷六8 26小諸なる古城のほとり 卷七4 14晩春の別離	卷二13 27千曲川のほとり 卷三15 29椰子の実 卷六8 26小諸なる古城のほとり 卷七4 14晩春の別離	卷二13 27千曲川のほとり 卷三15 29椰子の実 卷六8 26小諸なる古城のほとり 卷七4 14晩春の別離	卷二13 27千曲川のほとり 卷三15 29椰子の実 卷六8 26小諸なる古城のほとり 卷七4 14晩春の別離	卷二13 27千曲川のほとり 卷三15 29椰子の実 卷六8 26小諸なる古城のほとり 卷七4 14晩春の別離	卷二13 27千曲川のほとり 卷三15 29椰子の実 卷六8 26小諸なる古城のほとり 卷七4 14晩春の別離	卷一16欠 卷七2 15小諸なる古城のほとり
「名も知らぬ遠き島より……」 (藤村詩集)	「ある日また私は光岳寺の……」 (千曲川のスケッチ) 「名も知らぬ遠き島より……」 (藤村詩集) 「小諸なる古城のほとり……」 (シ)	「ある日また私は光岳寺の……」 (千曲川のスケッチ) 「名も知らぬ遠き島より……」 (藤村詩集) 「時は暮れゆく春よりぞ……」 (シ)	「ある日また私は光岳寺の……」 (千曲川のスケッチ) 「名も知らぬ遠き島より……」 (藤村詩集) 「小諸なる古城のほとり……」 「時は暮れゆく春よりぞ……」 (シ)	「ある日また私は光岳寺の……」 (千曲川のスケッチ) 「名も知らぬ遠き島より……」 (藤村詩集) 「小諸なる古城のほとり……」 「時は暮れゆく春よりぞ……」 (シ)	「ある日また私は光岳寺の……」 (千曲川のスケッチ) 「名も知らぬ遠き島より……」 (藤村詩集) 「小諸なる古城のほとり……」 「時は暮れゆく春よりぞ……」 (シ)	「ある日また私は光岳寺の……」 (千曲川のスケッチ) 「名も知らぬ遠き島より……」 (藤村詩集) 「小諸なる古城のほとり……」 「時は暮れゆく春よりぞ……」 (シ)	「ある日また私は光岳寺の……」 (千曲川のスケッチ) 「名も知らぬ遠き島より……」 (藤村詩集) 「小諸なる古城のほとり……」 「時は暮れゆく春よりぞ……」 (シ)	「ある日また私は光岳寺の……」 (千曲川のスケッチ) 「名も知らぬ遠き島より……」 (藤村詩集) 「小諸なる古城のほとり……」 「時は暮れゆく春よりぞ……」 (シ)	「小諸なる古城のほとり……」 (藤村詩集)
作者注・注3 写真1	作者注・注3 写真1	作者注・注5 写真1	作者注・注3 写真1	作者注・注3 写真1	作者注・注3 写真1	作者注・注3 写真1	作者注・注3 写真1	作者注・注3 写真1	作者注・注3
S・13・2・28訂正	S・12・9・17		S・13・2・28訂正	S・13・2・28訂正	S・13・2・28訂正	S・13・2・28訂正	S・13・2・28訂正	S・13・2・28訂正	S・10・3・5修正

現代 女子国語読本 五年制用	現代 女子国語読本 四年制用		昭和女子国文	最新女子国 文読本
	八波則吉編		新村出編	佐々木信綱 武田祐吉 編
	東京開成館		金港堂	湯川弘文社
巻二(25) 25春	巻七 4 23 晩春の別離 巻八 16 23 おえふ	巻二 25 25春 巻五 13 25 現代詩大観 (その五)	巻二 19 25 文章雑話 巻五 13 25 現代詩大観 (その五)	巻三 12 26 短夜の頃 自修文 1 3 子に送 る 巻四 3 20 文章道 巻六 18 20 千曲川旅情 の歌 一、二 巻七 自修文 2 3 水戸浪士の西下
「二月に入って…」 春は来ぬ(抄) (千曲川のスケッチ) (藤村詩集)	「二月に入って…」 春は来ぬ(抄) (藤村詩集) 「時は暮れ行く…」 「她女ぞ経ぬる…」 (シ)	「二月に入って…」 千曲川旅情の歌 「小諸なる古城のほとり…」 (藤村詩集)	「十七八歳の頃…」 千曲川旅情の歌 「小諸なる古城のほとり…」 (藤村詩集)	「毎日よく降った。…」 (市井にありて) 「大震災のあった日から…」 (嵐) 「十七歳の頃私は…」 (飯倉だより) 「小諸なる古城のほとり…」 (藤村詩集) 「水戸浪士の西下が伝はると…」 (夜明け前)
作者注・ごい 8・注5・写 真3・絵4	作者注・注13 カッタ4 ごい1・注3 カッ	作者注・ごい 8・注5・写 真3・絵4	作者注・ごい 18・写真2 作者注・注1 3・ごい4	注6・絵1・ ごい6 注10・ごい17 写真3 注7・ごい10 写真1 注3・ごい2 注15・ごい5 絵1
S・9・7・20 修正五版	T・13・10・28	S・9・7・28	S・9・7・28	S・12・5・10 訂正再版

			卷七 5 25 晩春の別離 卷八 5 22 おえふ	「時は暮れ行く…」 「処女ぞ経ぬる…」 (シ)	作者注・注 13 カット 4 作者注・こい ット 注 3・こい ット 5	S・12 T・13 7・10 28 修正五版
現代 女子国語読本			卷二 25 26 春 卷七 5 25 晩春の別離 卷十五 23 おえふ	「二月に入って…」 「時は暮れ行く…」 「処女ぞ経ぬる…」 (藤村詩集)	作者注・こい 8・注 5・写 真 3・注 4 カット 注 13 作者注・こい ット 注 3・こい ット 5	S・12 T・13 8・10 14 修正七版
女子新国文 新訂版	芳賀矢一編 橋本進吉 訂補	富山房	卷一 9 26 しあはせ 卷五 10 25 短夜の頃 卷七 5 23 晩春の別離	「しあはせが…」 「毎日よく降った…」 「時は暮れ行く…」 (をさなものがたり) (藤村詩集)	作者注・写 1 2 3 真 1 2 3 文 1 2 3 作者注・注 7 写 1 2 文 1 2 作者注・注 6	S・10 6・25
女子新国文 新版			卷一 7 25 しあはせ 卷五 10 25 短夜の頃 卷七 5 23 晩春の別離	「しあはせが…」 「毎日よく降った…」 「時は暮れ行く…」 (をさなものがたり) (市井にありて) (藤村詩集)	作者注・写 1 5 文 1 5 作者注・注 7 写 1 2 文 1 2 作者注・注 6	S・12 7・13
			卷二 25 25 桃の節句	「三月の桃の節句は…」 (市井にありて) (藤村詩集)	作者注・注 2 作者注・注 6	S・12 訂正六版

<p>女子新国文 四年制用</p>	<p>女子新国文</p>	<p>子女 新選国語読本</p>
<p>久松潜一編 至文堂</p>		<p>山岸徳平編 岩田九郎編 帝国書院</p>
<p>卷三 15 27父を追想し て 卷四 23 24春 卷五 2 24晩春の別離 卷八 3 22朝なり 2 2 昨日またか くてありけり</p>	<p>卷二 25 25桃の節句 卷三 15 27父を追想し て 卷四 23 24春 卷五 2 23晩春の別離 卷八 3 23小曲二章 1 2 葡萄栗鼠の 木彫を観て 卷九 4 21逝く春を惜 しむうた二 首 1 2 おえふ</p>	<p>卷一 14 27港の寺 卷二 12 27落葉 卷三 21 25椰子の実</p>
<p>「父上。九つの歳にお膝下を離れ：」 (海へ) 「たれかおもはむ鶯の、涙もこぼる冬の 日に：」 (藤村詩集) 「時は暮れ行く：」 (シ) 「昨日またかくてありけり：」 (シ)</p>	<p>「三月の桃の節句は：」 (市井にありて) 「父上。九つの歳にお膝下を離れ：」 (海へ) 「たれかおもはむ鶯の：」 (藤村詩集) 「時は暮れ行く春よりぞ：」 (シ) 「舟路も遠し瑞巖寺：」 (シ) 「処女ぞ経ぬる：」 (シ)</p>	<p>「マルセイユのノートルダムは：」 (エトランゼエ) 「十一月に入つて急に寒さを増した。：」 (千曲川のスケッチ) 「名も知らぬ遠き島より：」 (藤村詩集)</p>
<p>注3 作者注 作者注 作者注・注 4・絵 5 作者注</p>	<p>作者注 作者注 4・写真 6 作者注 3・絵 1 作者注</p>	<p>作者注・注3 ごい7・写真 3 作者注・注2 ごい3写真3 作者注・ご 6・絵 1</p>
<p>S・10・6・27</p>	<p>S・10・7・22</p>	<p>S・10・8・10</p>

	子女 新選国語読本 四年制用	女子国文新編 第三版
	山岸徳平編 岩田九郎編	垣内松三編
	帝国書院	文学社
巻四 24 千曲川旅情 <small>の歌</small> 巻九 5 24 晩春の別離 巻十 3 21 おえふ	巻一 14 27 港の寺 巻二 12 27 落葉 巻三 21 25 椰子の夷 巻四 24 27 千曲川旅情 <small>の歌</small> 巻八 9 22 おえふ	巻一 5 24 日の出る前 巻二 22 25 茶の間 巻三 1 22 結晶の力 巻五 5 22 古城のほとり 巻六 3 22 言葉の術 巻八 16 16 春を待ちつ 巻十 12 19 夜明け前
「小諸なる古城のほとり…」 「時は暮れ行く…」 「処女ぞ経ぬる…」	「マルセイユのノートルダムは…」 <small>(エトランゼ)</small> 「十一月に入つて…」 <small>(千曲川のスケッチ)</small> 「名も知らぬ…」 <small>(藤村詩集)</small> 「小諸なる古城のほとり…」 「処女ぞ経ぬる…」	「鳥の世界は暗くて…」 <small>(をさなものがたり)</small> 「子供等は古い時計のかゝった茶の間に集つて…」 <small>(風)</small> 「十七八歳の頃、私は…」 <small>(飯倉だより)</small> 「小諸なる古城のほとり…」 <small>(藤村詩集)</small> 「詩を新しくすることは、私に取つては…」 <small>(市井にありて)</small> 「フランスの旅にある頃…」 <small>(春を待ちつつ)</small> 「枕もとには本居宣長の遺著…」 <small>(夜明け前)</small>
7 作者注・注3 7 作者注・注3 8 作者注・注3 10 作者注・注3	3 作者注・注3 3 作者注・注3 3 作者注・注3 3 作者注・注3 3 作者注・注3 3 作者注・注3 3 作者注・注3 3 作者注・注3	15 作者注・注3 1 作者注・注3 2 作者注・注3 3 作者注・注3 3 作者注・注3 3 作者注・注3 3 作者注・注3 3 作者注・注3 3 作者注・注3
	S・10・8・10	T・13・10・30 S・10・9・9 第三版

日本女子読本 改訂第二版	女子国文新編 四年制	女子国文新編 第四版
高木武編		
富山房		
卷二 10 25 落葉 卷三 14 25 椰子の央 ・四 21 25 桃 「毎年十月の二十日といへば……」 (千曲川のスケッチ) 「名も知らぬ……」 (藤村詩集) 「五月の菖蒲が男の尻に……」 (市井にありて)	卷一 5 24 日の出る前 卷二 22 25 茶の間 (付) 卷三 1 20 結晶の力 卷四 15 22 人工の翼 卷六 3 20 言葉の術 卷八 14 18 春を待ちつ 「鳥の世界は暗くて……」 (をさなものがたり) 「子供等は古い時計のかかった……」 (嵐) 「老年は私が遠しいたいと思ふ……」 (飯倉だより) 「十七八歳の頃、私は……」 (シ) 「けふも町の空に……」 (桃の雫) 「詩を新しくすることは……一、二、」 (市井にありて) 「フランスの旅にある頃……」 (春を待ちつ)	卷二 22 25 茶の間 卷三 1 22 結晶の力 卷五 5 22 古城のほとり 卷六 3 22 言葉の術 卷八 16 16 春を待ちつ 卷十 12 19 夜明け前 「子供等は古い時計のかゝった茶の間に……」 (嵐) 「十七八歳の頃、私は……」 (飯倉だより) 「小諸なる古城のほとり……」 (藤村詩集) 「詩を新しくすることは私にとって……」 (市井にありて) 「フランスの旅にある頃……」 (春を待ちつ) 「枕もとには本居宣長の遺著……」 (夜明け前)
2 2 作者注・注 5 5 作者注・注 8 8 写真	14 14 作者注・注 24 24 作者注・注 1 1 2 2 作者注・注 9 9 2 2 作者注・注 6 6 写真 2 2 作者注・注 3 3 文節 2 2 作者注・注 37 37	3 3 作者注・注 7 7 2 2 作者注・注 8 8 3 3 作者注・注 9 9 3 3 作者注・注 8 8 2 2 作者注・注 3 3 2 2 作者注・注 3 3 3 3 作者注・注 33 33 7 7 作者注・注
S・11・7・9 改訂第二版	S・12・7・31	T・13・10・30 S・11・1・14 第三版訂正再版

	子女 大日本読本 新訂版	藤村作編	中等学校教 科書	卷七 8 (28) 出雲大社に詣でて 卷五 11 (28) 富浦ふく頃 卷六 22 (28) 冬より春へ 卷七 8 (28) 出雲大社に詣でて	三、山上の春「春雨あがりの朝」 「大社に詣いた。…」 (山陰土産) (シ)	作者注・注 18 写真 3	卷一—四 欠本 S・18・6・29 修正四版
	子女 皇国新読本	山嶽徳平 岩田九郎編	帝国書院	卷二 12 (27) 落葉 卷三 21 (25) 椰子の実 卷四 24 (27) 千曲川旅情の歌 卷九 5 (25) 晩春の別離 卷十 3 (21) おえふ	「十一月に入つて急に…」 (千曲川のスケッチ) (藤村詩集) 「名も知らぬ」 「小諸なる…」 「姪女ぞ縫ぬる…」	作者注・注 2 ごい 3・注 2 写真 1 作者注・ごい 2 ごい 2・注 3 作者注・注 3 ごい 5・注 3	S・12・5・31
				「十一月に入つて…」 (千曲川のスケッチ) 「名も知らぬ」 (藤村詩集) 「小諸なる…」 「姪女ぞ縫ぬる…」	「十一月に入つて…」 (千曲川のスケッチ) 「名も知らぬ」 (藤村詩集) 「小諸なる…」 「姪女ぞ縫ぬる…」	作者注・注 2 ごい 3・注 2 写真 1 作者注・ごい 2 ごい 2・注 3 作者注・注 3 ごい 5・注 3	S・12・6・5

新女子国文 四年制用	新修国文 四年制 女学校用		新修国文 女学校用	子女 皇国新説本 三年制用	子女 皇国新説本 二年制用
久松潜一編			富山房編 編輯		
至文堂			富山房		
卷一5 / 24 青蒲 卷二23 / 24 桃の節句	卷四9 / 26 お茶の話 卷五9 / 26 大きな言葉 と小さな言葉 卷七6 / 42 晩春の別離	卷四9 / 26 お茶の話 卷五9 / 25 大きな言葉 と小さな言葉 卷七6 / 24 晩春の別離	卷四9 / 26 お茶の語 卷五9 / 25 大きな言葉 と小さな言葉 卷七6 / 24 晩春の別離	第二学年用 23 32 落葉 第二学年用 15 33 椰子 の奥	下巻 27 35 おえふ
「三月の桃の……」 (市井にありて)	「国民の記念日でもなく……」 (藤村説本)	「私は茶の余り強いのは……」 (春を待ちつつ)	「私は茶の余り強いのは……」 (春を待ちつつ)	「十一月に入って急に……」 (千曲川のスケッチ)	「処女ぞ終ぬる……」 (藤村詩集)
作者注・注7 絵1 作者注・注4 絵1 作者注・注1 絵4	作者注・注7 作者注・注4 作者注・注3	作者注・注3 作者注・注4 作者注・注7	作者注・注3 作者注・注7 作者注・注3	作者注・注1 作者注・注6 作者注・注3 作者注・注3	作者注・注3 作者注・注5 作者注・注3
	S. 14. 8. 22	S. 12. 6. 1 S. 12. 13 訂正再版	S. 12. 6. 9	S. 13. 9. 26	S. 13. 9. 23

訂改 新女子国文	新女子国文	
◇	◇	
◇	◇	
<p>卷一 5 / 25 菖蒲</p> <p>卷五 2 / 22 晩春の別離</p> <p>卷十 5 / 19 おえふ</p> <p>〔国民の記念日でもなく…〕(藤村説本)</p>	<p>卷一 5 / 25 菖蒲</p> <p>卷三 14 / 25 文章の道</p> <p>卷五 2 / 22 晩春の別離</p> <p>卷八 3 / 23 小曲二章</p> <p>卷九 4 / 22 逝く春を惜しむうた二篇</p> <p>〔国民の記念日でもなく…〕(藤村説本)</p> <p>〔十七八歳の…〕(飯倉だより)</p> <p>〔時は暮れゆく…〕(藤村詩集)</p> <p>〔処女ぞ経ぬる…〕(シ)</p>	<p>卷三 6 / 24 文章雑話</p> <p>卷四 22 / 23 明星</p> <p>卷五 2 / 24 晩春の別離</p> <p>卷八 3 / 22 千曲川旅情の歌</p> <p>〔十七八歳の…〕(飯倉だより)</p> <p>〔浮べる雲と身をなして…〕(藤村詩集)</p> <p>〔時は暮れゆく…〕(シ)</p> <p>一、小諸なる古城のほとり、二、きのふまたかくてありけり(シ)</p>
<p>2 作者注・写真</p>	<p>作者注</p> <p>作者注・注 3</p> <p>作者注・注 4</p> <p>作者注・注 7</p>	<p>作者注・作者写真・写真 3</p> <p>作者注・注 3</p> <p>作者注・注 4</p> <p>作者注・筆・写真 3</p>
<p>S. 14. 10. 17</p> <p>訂正三版</p>	<p>卷二 欠本</p> <p>S. 12. 6. 25</p>	<p>S. 12. 6. 21</p>

訂改 新女子国文 四年制	新 新撰女子 国語読本 四年制用	新 新撰女子 国語読本	聖代女子国語読本 吉沢義則編
◇	佐々木信綱 武田祐吉 編	◇	◇
◇	湯川弘文社	中等学校教 科書	星野書店
卷二22、25桃 卷五19、24文章の道 卷八5、19おえふ	卷二7、23心の旅 卷三12、25短夜の頃 卷四3、20文章道 卷六18、21千曲川旅情 の歌	卷六18、21千曲川旅情 の歌	卷五10、26文章雑話 卷七4、27千曲川旅情 の歌 卷八2、25日本海と太 平洋
「三月の桃の節供は……」 〔市井にありて〕 〔十七八歳の……〕 〔飯倉だより〕 〔藤村詩集〕	「名もない草が……ある日私は、私の学校 の……」 〔をさなものがたり〕 〔市井にありて〕 〔嵐〕 〔飯倉だより〕	「十七八歳のころ……」 〔飯倉だより〕	「十七八歳のころ……」 〔飯倉だより〕
作者注・絵2 写真2 作者注 写真2 作者注・注1	作者注・こい 3 注6・こい1 注10・写真3 注7・写真1 注3・こい2	作者注・注2 こい13・写真2 作者注・こい 5・写真 作者注・注8	作者注・注2 こい13・写真2 作者注・こい 5・写真 作者注・注8
S・12・6・21 S・14・10・27 S・16・8・3 訂正三版 訂正五版	S・12・6・20 S・13・1・6 訂正再版	S・18・7・14 卷一 訂正四版 一四欠本	S・12・7・5 S・12・7・5 S・12・7・5 訂正再版

新制女子国語読本 四年制用	沢瀧久孝 木枝増一 共編	修文館	卷八 2 25 日本海と太平洋	「過去の日本人が日本海であるとするなら……」 (桃の架)	作者注・注8 S 16.9.27 訂正三版
中等学校教科書	卷七 4 27 千曲川旅情の歌 卷八 2 25 日本海と太平洋	「十七八歳のころ……」 (飯倉だより) 一、小諸なる古城のほとり二、千曲川のほとりにて (藤村詩集) 「過去の日本人が日本海であるとするなら……」 (桃の架)	作者注・注2 「十七八歳のころ……」 (飯倉だより) 一、小諸なる古城のほとり二、千曲川のほとりにて (藤村詩集) 「過去の日本人が日本海であるとするなら……」 (桃の架)	作者注・注1 「十七八歳のころ……」 (飯倉だより) 一、小諸なる古城のほとり二、千曲川のほとりにて (藤村詩集) 「過去の日本人が日本海であるとするなら……」 (桃の架)	S 18.6.30 訂正四版
卷一 4 24 言葉の愛	卷二 17 21 桃	「い、いぬも道を知る……」 (市井にありて)	作者・出典注 「い、いぬも道を知る……」 (市井にありて)	作者・出典注 「い、いぬも道を知る……」 (市井にありて)	S 12.7.20
卷三 18 25 いろはがるた	卷四 3 26 文章の道	「十七八歳のころ……」 (飯倉だより)	作者・出典注 「十七八歳のころ……」 (飯倉だより)	作者・出典注 「十七八歳のころ……」 (飯倉だより)	S 12.7.20
卷五 7 20 短夜の唄	卷六 20 22 千曲川旅情の歌	「毎日よく降った……」 (市井にありて)	作者・出典注 「毎日よく降った……」 (市井にありて)	作者・出典注 「毎日よく降った……」 (市井にありて)	S 12.7.20
卷一 13 25 子供のため	卷三 1 24 桃	「三月の桃の……」 (飯倉だより)	作者注・注8 「三月の桃の……」 (飯倉だより)	作者注・注8 「三月の桃の……」 (飯倉だより)	S 8.8.16
卷四 17 23 文章の道	卷五 3 25 潮音	「十七八歳のころ……」 (飯倉だより)	作者注・注3 「十七八歳のころ……」 (飯倉だより)	作者注・注3 「十七八歳のころ……」 (飯倉だより)	S 12.7.25 修正三版

<p>新制女子国語読本 四年制用</p>		
<p>卷一 13 25子供のため 卷四 17 23文章の道 卷五 3 25潮音</p>	<p>卷八 14 23嵐 18 23 藤村詩抄 卷九 20 22婦人の眼ざめ 17 22 藤村詩抄 卷八 14 22嵐 卷五 3 25潮音 卷四 18 24文章の道 卷三 1 24桃</p>	<p>卷八 14 23嵐 18 23 藤村詩抄 卷九 20 22婦人の眼ざめ</p>
<p>「三月の桃の…」 「十七八歳のころ…」 一、潮音「わきて…」二、打てや鼓「打てや鼓」 一、書籍「名もない草が…」二、図書館「ある日、私の…」三、屋根の石と水車「屋根の石は…」 (をさなものがたり) (市井にありて) (飯倉だより)</p>	<p>「子供等は古い時計の…」 一、千曲川旅情の歌(一)のみ、二、椰子の裏「昔から婦人には…」 一、千曲川旅情の歌(一)のみ、二、椰子の裏「昔から婦人には…」 一、潮音「わきて…」二、うてや鼓「うてや…」 「子供等は…」 一、千曲川旅情の歌(一)のみ、二、椰子の裏「昔から婦人には…」 (飯倉だより) (藤村詩集) (嵐)</p>	<p>「子供等は古い時計の…」 一、千曲川旅情の歌(一)のみ、二、椰子の裏「昔から婦人には…」 (嵐) (藤村詩集) (飯倉だより)</p>
<p>作者注・写真 こい1 作者注・注3</p>	<p>作者注・注4 作者注・注3 作者注・注6 作者注・注4 こい1 作者注・注4 写真1 作者注・注8</p>	<p>作者注・注6 作者注・注3 作者注・注4</p>
<p>S. 12. 8. 4 卷七・八欠本</p>	<p>S. 12. 7. 25 S. 13. 1. 10 修正再版</p>	

国語 女子用							
岩波書店 編輯部編							
岩波書店		中等学校教 科書					
一、23 32落葉	卷四19/22桃 卷五2/21文章の道 卷八11/20巴里だより 卷十16/20草枕	卷一13/25子供のため 卷三1/24桃 卷四17/23文章の道 卷五3/25潮音 卷八17/23藤村詩抄	卷一18/25子供のため 卷三1/24桃 卷四17/23文章の道 卷五3/25潮音 卷八17/23藤村詩抄	「三月の桃の節句は……」 （市井にありて） 「十七八歳の頃……」 （飯倉だより） 「『都市としての面積から言へば……』」 （平和の巴里） 「心の宿の宮城野よ……」 （藤村詩集）	「三月の桃の……」 （市井にありて） 「十七八歳のころ……」 （飯倉だより） 「『潮音』「わきて……」、二、打てや鼓「打てや鼓」 （藤村詩集） 一、千曲川旅情の歌、二、椰子の夾 （シ）	「一、書籍「名もない草が……」二、図書館「ある日、私の……」三、屋根の石と水車「屋根の石は……」（をさなものがたり） 「三月の桃の……」 （市井にありて） 一、潮音「わきて……」二、打てや鼓「打てや鼓」 （藤村詩集） 一、千曲川旅情の歌、二、椰子の夾 （シ）	「十一月に入って……」（千曲川のスケッチ） 作者注・注1 ごい3・絵注11
	S・13・12・7・27 訂正再版	S・12・8・4 S・18・8・2 修正四版	S・12・8・4 S・18・1・20 修正再版	作者注・写真 ごい4 作者注・注14 作者注・出典	作者注・写真 ごい1 作者注・注3 作者注・注3	作者注・写真 ごい1 作者注・注3 作者注・注3	作者注・注3 作者注・注6 作者注・注14 作者注・出典

皇国新説本	山岸徳平編 岩田九郎編	中等学校教科書	卷一 23 落葉 卷二 15 33 椰子の実	「十一月に入つて…」 (千曲川のスケッチ) (藤村詩集)	作者注・写真 2注1・ごい 作者注ごい6	S・18・7・10 修正四版 巻一—三まであり
皇国新説本	山岸徳平編 岩田九郎編	中等学校教科書	卷一 23 落葉 卷四 18 21 春は来ぬ 卷十 7 19 千曲川旅情 の歌	「ある日、私は光岳寺の…」 (千曲川のスケッチ) (藤村詩集) 「春は来ぬ…」 (藤村詩集) 「小諸なる…」 (ク)	作者注・写真 1字注11・写真2 作者注・字注 作者注・字注 作者注・字注3	S・14・10・28 S・14・10・28 S・15・10・11 訂正再版
皇国女子国語説本	新村出編	金港堂	卷二 12 22 収穫 卷四 18 21 春は来ぬ 卷十 7 19 千曲川旅情 の歌	「ある日、私は光岳寺の贖手を…」 (千曲川のスケッチ) (藤村詩集) 「春は来ぬ…」 (藤村詩集) 「小諸なる…」 (ク)	作者注・字注 1字注11・写真2 作者注・字注 作者注・字注3	S・14・10・28
昭和女子高等国文	金子彦二郎編	光風館	卷二 12 22 収穫 緋桜の巻 3 25 婦人の眼ざめ	「昔から人には眞みといふ事が…」 (飯倉だより) (飯倉だより)	作者注・字注 写真4 作者注・字注5	S・S・14・13 11・10 修正再版 2818
子女 皇国新国文	山岸徳平編 岩田九郎編	帝国書院	緋桜の巻 3 25 婦人の眼ざめ 二、15 33 椰子の実 四、27 35 おえふ	「昔から人には眞みといふ事が…」 (飯倉だより) (藤村詩集) 「名も知らぬ…」 「処女ぞ経ぬる…」 (ク)	作者注・ごい 6・絵1 作者注・ごい ごい5・絵5 ごい5・絵5	S・13・9・23

付記

藤村作品の教材調査にあたっては、国立教育研究所付属教育図書館のかたがたにかくべつの便宜をはかっていただいた。記して、あつく感謝の意を表する。

(広島県立呉三津田高等学校教諭)